和語陰隲録 全

ロ 9
3442

和語陰隲録

ロ9
3442

門口9
3442
忘

文政元寅再刻

和語陰騭録 全

明 袁了凡 著
日本 淵在寛 譯

此編ハ大明袁了凡ト云人甚ダ天啓ヘ表彰ノ為ニ施ヲ為シテ光ヲ男女ニ及ボシ且ツ書ヲ著シ徒ニ修ヒ功ヘヲ災害ヲ免ルヽ事ヲ説ケリ

和語陰騭録序

古曰積金積書不如積陰徳ト

冥々中遺子孫永垂之計誠哉此

言也吾郷有一元名老人者讃州人

也博學識讓不求聞達憲其

風采未嘗見者不少予幸奉
慈誨久矣一時披覧典之暇為吾
靈口授陰騭録而此篇也實了
凡先生所以嘗踐陰德而為子
孫監豈以拜聽者莫不擊節
嘆賞矣惟愿文辞至簡而讀
者憾焉爰舉衆切請為愚夫愚
婦假國字以解之公諸天下師
保領而就蒙於是一篇之大旨
瞭然乎目下而後初足以披芳

寒矣嗚乎夫人之處世也遊乎
畢之穀中固不能遁順逆之境
而況有不測之變 熟視天立
命之說則天網恢恢疎而不洩
溫觴之勢如物使然豈不幽

且確乎哉 吾師於自稱元名
老人也豈不亦積陰德之根據
乎同志每弗躍虞如者則乞
予題言予雖不肖而闕此盛
事亦何與幸歟是所以敢不

辞安永丙申春三月南越
角鹿乾一重益謹叙

島田藏書

凡例

○此書和漢ともに未定稿なる事を受ると雖も甚沙汰すべき書の集者ハ太明賜進士袁黄字ハ了凡と云人甚児天格へ教訓の物語りを綴りたる者なり一篇の始終其人の歴史綱鑑の評者にて唐土にても名ある大儒なり日本文禄年中豊臣公朝鮮征の時も賛畫軍務となりて大将加藤如松小従て朝鮮へ来りしと人なり

○此和漢小本文を挙て漢文をそへたるものなれども其小本文を用るほどの人

八些和様を備ふるでもでもむづかしうもあるまじ
を畧とるなり
○此書の一體達意を專として辭ぢくもなく
故文体ふ多分の飾言ハ無くそもの字〳〵をそれ
二字三字一句二句ていひ結びたる者故書もところ
ふくさもなく〳〵さうの処ハ解しやすけやう
ふとなり言外のこと味を推くろう。恩をとくく
たるも有り。然うとて本文のみのを添加
もくるとハんべつざる者なり。又但通俗を專
をもあふ字句及び事實ハ必ず一〳〵み注釋せ
ざる者なり

○唐土ふ及第の業とつ
とくく寫本も諸書を引て詳也。番〳〵ハ繁花なる
なり。爾後耳をくく云ひ
とちがひ。此方にて云ひ
村里ごとに。学校として学問所を設けて。士農工
高のそべびなく。志なる
べーめ。芸中にて学才ある者を。村の学校へ
選びもて郡の学校へ挙郡より城下へ城下より
京へと次〳〵ふ選び出して。甚だ甚だ芸人の生れつき
の向なくふ従て。百姓役人ふ仕立るなり。
故ふ志なき人ハ芸也の為ふ学宮をとるなり。

陰騭録

芸を及第の業とつとめ也。今日まで卒人そだてゞ日ハ士ふ作り旗なびかれるゆ。大名ふ作るゆ故唐士の人の唯此事のこゝろをのべむとするゆ。固て此の書の好経皆及第のたとへを者るゆ。此るを以第一のんになゆ

一文意の断絶せざるを。章段を短くとるへ。讀者の退屈を恐るゝ故ゆ

陰騭録

陰騭録

和語陰騭録

陰騭の二字ハ尚書経ふ出てより後ときゆふこゝろを名つけたる者ゆ

立命之学　立命ハ天命を立ゆふこゝろ。而るに天命ハ死生有命富貴在天とそ。天命ハ賤の者も長命にをゆり貴族の者も短命にをゆり一定不易の者ゆ。故ふ此篇を立命之学とそ題ゆる也

予幼かの時父ふ離るゝ。甚後成長して及第の業をまなびしとろに。或時母の仰ふ曰く。其方が父死ぬるとき。我等指南て世渡る業も知らぬ。其ゆ及第の業ハ行末程も知れぬわざなるをバ今より醫者ゝ為ゆ。又世渡の為ふ

其方が父も兎こそ思ひてそこそこ宣つ。母人の命るれバ。否むべくやうなれバそうう警つを学びーるりさて或時予並雲ちとよちれ遊び居るーに。一人髯長こそ老人出来まり。こ徳のくとこへれハ予も客を改め慇懃ようてるーたりこ。時ふ此老人るれ向ひて曰。足下ハ及第出世をそうくふて年八決ーて、学校ふそえて進むくるう。何ぞ及第の業こを捨て醫者ふ成まる耶。吾ハ雲南こて孔先生と稱せらくる者こて。邵康節の易道の秘極をなるるものり。此易道者外ふ授くべき者ふ。但

来厳こ仰ふ而こ数ある故ふ遠くこと踏とる来まりき殿そんれ為こそ処をこんて。楽内せらくべくこるものげふりけり。我ぞそ時何こも怪しれるれる思ひうごるも先ん私宅ふ帰りぬ。母人ふ此由を告ひけれバ。母人の曰それハ奇妙なるをこ云者こそ。行ても。ーケ所こて底の人こてハきまじ。浮ふ大切ふうやまひて。其教を受てこんるべくこるり。此こ困くーるをこつらひ態ふかくまひ居そり

さてそれそう。試こ名このるをこ借古去むるれ城こ

ふ一つも遠ふるる。當時のくこも九夫のやうれ

八云ハざりき。此ふたり又母人（やゝ）此老人の
教ふまゝに世（よ）の務業を止（とゞ）めくゑのごとく及第の学文
をせうさて此老人を殿（でん）某の年ごろ八学校入り。某の年ごろ八擯人ふ挙ら
れ。縦令村の学校を授（さづ）けてハ。第十四番目那の学校ふ
て八第七十二番目。城下の学校を授けてハ第九番目ん。
某の年ごろ某の年ごろ公儀の御扶持を含（ふく）ある
る都（すべ）て九十二ふみ斗（ばかり）。而して後ふ某の年ごろ
貢人と云ふ成（なる）こと貢（みつぎ）く後某の年に。選挙
せらるゝ所の大尹と云官と成るるり此
役目を務（つとむ）ること二年まゐて又京ふ登（のぼ）り十三歳

八月十四日母の時ふ病死するゆり憐（あわれ）ある貴
辰八一生子ども一人も
る共悉く書（かき）とゞめ（を）置（おき）て慎んで一生の覚悟を定
めらるゝゆり
此ごろ後村学ふ郷学国学ふ著（あら）て選（えら）れ出る毎ふ
そ妻教八云ふ如（ごと）くふぐそる極（ごく）細のるゆそも一つとし
て老人の言ふ違（たが）ふるゆ其中一つふても背（そむ）
き手（て）柱（はしら）持（もち）を頂戴（ちょうだい）するゆ老人る九十一石ゐ斗
こと（よつ）而（て）るふ七十俵（ひょう）石ゐ及ぶ時屠公と云人ふ手（て）を
ひつさふ忍（しの）れりるや法の如（ごと）の時節（じせつ）りお方（かた）
餘の人ふ推（すゐ）ほぜて貢人ふ出（いだ）さんとせられるり

此時予ごんおこ斗石のお遠ま仕て老人を疑うひなり然るとそろよ又揚そそろよ人有りこを不吟味るこそ人自出して屠ぞを糺されて相やあふるり結句ハ老人のおひ定めるるうり年月い処びくまるれ此時狂く老人を疑ひそり其の激とうくしてを経る処ま又渠公と云人ろうそ文章を見て大ふ驚き此を苦らぬ器量也うやうの器量の人をむさ仕て御用ふそくぬそ不忠のるりるりとて揚その憤を解和うけ重く役百ふ主てく法の通りの時ふ貢人とみまろ此時挟持方を計るふ恰ど老人の言バ1毫もたゞ

ハど九十一石ふ斗とるるも。予此まふ困く進も退も痰きも違きも盡く天命一定の道理唱うとふ。るを悟り且つ老人の妙術1嘆伏して孫一生乃覚悟を究め毛頭ふの望こるを止めてらくくと成しるり

それう熟都ふへて留まり1年也しぶ。其一間ふ故有て南雍と云処へるりし役一所へ基せざる希ふえづ棲霞寺ふ往いくそ1ら舊交雲谷禅師1ご伤い従来離綱の情を速べふそ世同出世の物語1長ド三日三夜寝食を忘まてくりぶ雲谷ふ法門乃悟りを扨ざろへ妄1会1障へられバるり年ふ

我と住話さるゝ事三夜の間おのゝの妄念を起
さゞる事なし。何ぞ見解有て然るやと云。
予が曰我れ孔先生と云る仏教の教を受て世の
中の貴賤貧賤生死皆定りの教有るゆを
知るなり。然るに八何の額ひおるゆ有て妄念を起
さゞるやと云ゝ。其時雲谷大に笑ゝ曰我今
まで八貴賤を当世そう千万人ゝも乞ち越ゝる
豪傑の人ゝと思ひしに今の迄言を受てい
まだ一通りの凡人なりけり。夫ゝ八互に黙然ゝう。
良ありて予が曰ざるうに何ゝぞ定て有理
ありぐゝとひゝんや雲谷の曰く大ゝ

道理なるゆゝう。予ゝう今数ゝ之者を。生の朝
ゝう死の夕べよるゆゝで。一定ゝて生を出る者なり。
而もぞも極苦の人ゝと。極苦の人ゝと。所作の苦苦
の強きよりゝ定めゆゝう今数の多用
さゝゝゝゝゝ遠よゆゝう。個常底の凡人のゝ。今
救よ縛られて一生をゆゝう者なり。貴殿二十年来彼
老人よ養用ありゆゝえらるゝ。一毛の相違も無きゝ取ゝ
ゐらるゝ凡人なりとゝう。予が曰是ゆゝ奇らしゝ論
をゆゝる者ゝよ。而る時ゝ天今
一定の救も遁るゝ者ゝて候や。雲谷曰
ゝるゝも遁さらるゝゆゝ。我を世間ゝとるゝ古今

もよ。名ゐるき人ほど此天樓よ迷つ。実ニ厳戒誡を
守んと思られべ。我をとゝてくらを不らんして守かるべし。
聖人の作りめる書経よ曰作レ善天降二之百祥一作レ不
善天降二之百殃一と。此意ハ人善を為せバ天より百の福を
與へ悪を為バ天より百の禍を降ゝとなり。天命下
一定の者ゆゑバ禍福も一定ゐるべし。此のごとく
一生の内よ於て與へつ奪らつ不定ゐるや。又我が佛
教の中よ求功名得二功名一求富貴得二富貴一求男
女得二男女一求長寿得二長寿一とつゝ。然ども初生乃
至定りたる天命も甚ハ後の取行よ因て中途よ於
の天命を変じて。或ハ福を與へ或ハ禍を與へつゝ

ゝり。左傳よも陳の慶氏が殺されて處よ書経をひ
て天命ハ常ゐき者とつゝ。此ハ聖人法門の如来倶よ妄語
ゐり。何とゆへぞやとゝゝ
予が曰。儒仏の聖徳を引て矛盾ゐき
る也。但一今かゝ疑ひ無き非ず。子曰の言バよ求
則得之求在我者也とつゝ。孔子の言バよ
我が身よ備りたる仁義禮智の道徳を求るなり。
故よ求在我者云よ非ずやゝ内よ備りたる所乃
功名富貴ゐどを求ゝとゝゝ仏説ゝ出
とも孟子なごの寓ハざるる也。雲谷曰儒仏の乃深

廣狹通路等の鈔向ハ各別なるべし。然則感通乃道理よりいでて全く不同ハなき者なれども後儒ハ佛法を疾むの強き故ニ聖道の仏理ニ依るやうでを破滅せんとす。此ニ依て正賢の誘導と曲解をなす多し。貴殿もまた西土の諸師を見給ふ。今我一切の禍福なんどいふおそれありとて。例を引て西土の諸師を解き示すべし。因らく云ふ。釈尊在て云ひ給ふ。愚人の止むことを得ざる者。針を打て人を呪咀をなすも一心の感通ニ依る。或ハ人の眼をおつぶし。或ハ足をおるやまた。或ハ余をうえ殺をなす。此をみれば眼をおつぶし金遮る。

足をおるやまた横槌も。余を取殺さんと刀も外ふり持ちまるみを水だ。咄人中ふり取出ふる物ハ非ざや。又若事れ有て云ふ。鯉魚美女詩ゲ雙鯉を得ふる者ふり。辭禹ハ本と王位をつぐべきをなみて出ふる者ふり。辭禹ハ本と王位をつぐべきをなみて非を。匹夫の時ふり仁徳を積で。四百餘州の主と成ふり。此等もんの誠ふり四百餘州を取出ふる。是等の例を以て孟子の文意を見てぐし。在我者ハ非ざや。功名富貴一切の福分も皆在我者ハ非ざや。功名富貴一切の福分も皆放我ニ矣とふり。若し我ニ内ハ向て於ては。

よ勿よて論阿或ハ種々の謀計を運らしておるるも
おゆうの為方ハ皆篇もかぐれども天命の許
さゞれバせまる而ハ成就せぬりのみ。故ニ孟子乃
次下の文よ。求之有道得之有命是求無益於得
也求在外者也ハ意ハ功名富貴等ハ外よあるも
やうなれども。内ニ勿ク求まじ得ラるハ皆あり。外
よ在る者とんな外ニ勿て務ゑ求るハ得ラるハ皆ハ
とるり
さて又裁りのまこ示をてるみるぐくとんを傾けて
ぐるうべし。孔聖人の書ハ一字千金ある者なり。
甚中ニも易経ハ天地鬼神をわひよふとうて作り。

たまふる者なれバ。一言一句ニくも。甚ぐ恐るべし。死者なり。甚ぐ恐るべし。其ハ易経ニ曰善不積不
足ニ以成名ニ悪不積不足ニ以滅身ニ小善為
無ニ益而不ニ為也ニ以小悪為無傷而不ニ去故悪積
而不ニ可ニ掩罪大而不ニ可解ニくハ意ハ人く平生ニ
おゐてつのるまいさのくまでも改るまし。然ル
ゆゑニみりんられど。軽く心得ニてゐるハ。其ハ
類ゑぞ煮殺し。焼殺しして。蚤蚊ぞ
殺ゑんがくのごとし。朋友
妻子眷属の間ニ處ニて。事ニふれて折ニつけて
さるゆハ多く善き者也。ゆゑよ易の文

意をいくことをべ。此等のかをも一て消へ失せばして惟く積り積りて大福と成て。一身をも滅亡をもまねくにも。元その人おのれの若事へ。何の祈禱もまじなひもやうにおくびも。なくぞ行へべ積べくも福徳をひろぞこそ也。又同じく易に曰積善の家に。有餘慶積不善の家に。有餘殃と。誠く知べき語也。次上の文意と全く同じき也。能んを付て考へべくれば。豈怪るに非ずやとぞ。

雲谷又予に向ひ。彼老人向きに厚の一生涯を。占ひ極められるべくれ。実に一一中ずされども。右老人のく我が未だ占ひ定をざる前に。一点のわ違ず語りせべ雲谷逐一実畢つく曰さてく驚き入る易者とて而ふ未だ厚只今の只をみもうの老人のごとく如く。登第も高も満なども子も寿命も又十二第に事極て予が胸中入る如く俾ひ又同く天命を変だる。ほんざうや否や予甚だ久して對て曰。未だ極となどれとも指ざれてはまだ意得ざるに何者ぞて高度に登る

人をそそふ大底皆福相あり拙者を福相を蔵
しと又言るを修行して福分を殖勤も成ず
をよしとし賢として世の中の悪びくく又
人の非をそくく西ひるを我ら智をかく
人をうごひ或を我うちふるを善を多く恣よ
取行ひにも妄よ愛相づくをいそ此等の類
皆畜類の相ふとあるやうの器として仕そこる
害ふ登るを慎べくんや且又劇悪の罪をもつて
推察ととるに拙者ふ於くをこをおぐくざる子細數
くあり一ふんそ地の獄なる処ふ入ふ多
く草木を生ぶ清ふるふ魚なき者あり拙ふ

ふくきれいざ紀ふてむさく穢ふてる甚きふ
あり是ふをふべきふあらねばや二ふ妻なで淫ふ利
ぎふる叨言ふ祖母を拘を妻育ふる如く人も氣質
ふ淫利あるふ多くの人をも書育ふれ者あれば天性
をもも沃ふおふ拙者ふ於をなどの草
木を吹き枯を叨言のやうふ怒氣も並くふふく
淫利の氣象あき者あれば草ひそぶ
ね人ぐふ水ふ洗ふべーこふ慈悲ふ天地のんふてお
生るの幸あり無慈悲ハ殺生の根ざーあり分ふく
拙ふ於ふなの如く平生の気持と氣ふる高
ようて人の急難をふくもふぐふをくぶーく

此土之ヲ彼ニ嫁テ芸ノ気質ヲ変ルノミヲ以テ此ヲ天地ノ差愛ノムヲ消ク故ヲヲ以ヲ
ヲ以ヲ以ヲ以

もろくされたち。己まくが非を知らずして。行るゐも個己れのこゼそうこそよ故ゐう。足下に於この物語ら。一くくの恥うくくるく覆ひ隠ととるゐうゐを足下の毛頸も隠さざど。我が非をうちゐうくに於此ま全く足下の猫相を生まべき前表也。太甲に曰く天作孽猶可違自作孽不可逭とぃ意ハ天命の宝うて受ざる禍ハ避べし。務方みうて逭ざ自身より作ったる孽ハ必逭てる能ざとゐう。此裏ちしで生来持ち給ふの福も。務方悪しけまバたちまち冥加よつきて禍を受るゐう。自分ゐう務免ゐる猫徳ハ天神地祇の冥加に依く。足下ハ我が非も奪よゐ能ねゐう。彼老人が足下を生せを遠ざ。ゐもゐーといいるに。天ゐう受け得よる孽ゐれバ。足下の務方よ依く。天神地祇ち褒下て猫徳の相よ転ぎべきこと。足下ハ我が非を知る人ゐう。倫屋私曲の人よ非ざ。甚ざゐる人ゐりぞうゐくゐを去て善よ移るハゐよの裏を及ぼそうゐもん男きゐのよ非をや。今ゐう猫雪のんを励まして務て徳を積こと慶くりち怒りの字を押し除し。天地至公愛のんことを記し。務て悪を棄て善よ移る志固く一決せバ此まての薄相の貴厳ハ。

即時に乱さるゝが如くぱつと今志一決して。くつと改めたる事を厭も。今日始めて生れ変りたるが如くぱつと生れ変りたる如しぱつと生れ変りたる如しぱつと生れ変りたる如し

ろう一切の諸佛も亦爾ろう。何ぞ釋迦牟尼佛ばかりを稱讃ろうするろうや。

假ぺ若二つありて。西二つの名をこつの指てく一名と記さうべし。二千條之滿よる内ふ半ばも決して成就をべきろう。雲谷之手に散らまて同。元て古くの聖者のふくを教ふるふんのひとを舟の約ひと。二つの教方ろう。上根の者ハ直ふんの約ひを用ひ。下根の者ハ生。舟の約ひを用ひく。り無ふくんの約ひのふくもひふくなろう。ふくふくふ来世の人ふく下根なれバ舟の約を專とをるろう。而れども半百ハ濁ろふくなるふんの約ひのなろう。而れども半百ハ濁ろふくなるふんの約ひの話をる。一と通りや。ふとべし。孟子曰。夭壽不貳脩身以俟之所以立命。此則愚儒が所謂を命の説の出不也。夫ふくん短命ろう。壽ハ長命のろう也ををるろう。今ろうを不貳ふくん。短命を更ひふくん。短命のふくを加へ上ろう。皆天通よ打任せて。微塵も心づひをなふく。浩然の氣よ混ふて心を虚空の如くに打ろうろう。只そ一念不動と云て一切の念ふくを起ふさ。妄念無相の時のふくハ虚空と全く同じやうなろう者ろう。虚空ハ本ろう。まろる。ろの名ろのふくれバ。長命短命の論もろう。況や長命を好ふ短命をふくもべきろう。

ハ甘くとき、ものう。此の如く五臭の人花を
虚空の如く無念無想にして置て一面後
よ徳を修ふ。即ち自ら求ニ多福一のく応ずる者也
くと謦へくと云う。一切の草木の種子ハ故ニ生
くるもの。若し種子を。大地へ植へて虚空ニ
至らバ陰陽妙ニ応じて。此種よを生ぜしむる。
へゆくもの。心を空よりもとつて。招門ニ宝ニ
ふる。是くの天命を抛捨てハ。それ計りせめ仕方ハ
種子を虚空よおいくゞ草木を生ぜしめ如く
るものゝ。そして修身と云ハ。即ち其の破損を修理ニ
して。即ち其の破損を去て功徳の枝木を以て修

理ニ応ずる意ニ。侯之ともふ。右の如く。徳を修行ニ
己ニ至ニ云ふ。又天ニ云ふ。寿命を與へ
富貴を與へ。其外一切の望ニ応ずるを指ニ
う。又ハ自然と一切の不願法ニ至ニ
の意ニ。即ち天乃法ニ
るもの。是を侯之と云ふ。元そ人の願ひ求る中ニ。
寿命ニ宝ニ者ニ至ニ孟子ニハ寿命の
者ニ。又道ニ至ニ聖道の幸福と知ニ
又ハ御祓を書く秘伝ニ
むぞ。て書たる祓ハ鬼神ニ知ニ。大切ニ

るゆゑう。芸書きさうろう筆を執て尋を書く時諸の雑念をお捨てく。一塵ちりの念を起さざるその時一誦ずゝと書き始むる也。此まことを混沌開基と名づく。

しの一誦ずゝと学ぶ書きさるをもて芸うる事憲起らざれば芸芽能ありといふ。上の五字の大壽不識とは道家の一念不動乃ち味ことをふくんの行ひをなく。古今を會得せらるべし。さて身の行ひとは別のるもあらじ飢ふる者に食を施し。寒紀者に衣を與へなどする底のるゆうのるを行ふ者の悪んよりるべきやうはなけれども心の行ひとは云者に比ぶとバ未だ

垢多しと今ろに書とても未だ心の行の場所ふるものあるゆゑで此ら開く芸代りよるるを教也べし。夫我が衆の準提陀羅尼と足を倦もる者も但現在一旦の罪業を滅するのみふらざる過去無量劫来の造罪を消滅もるゆ芸文に曰く曩謨颯颯多南三藐三没汰倶胝南怛侈也他。唵者禮主禮。準提娑嚩賀。もり此呪を孚生間断なく誦もるゆゑに我まで唱へられよ然ども心で唱て後ハ虚空無相の代ゝと我ハ彼の身ハいかきて朴明を感動もるの實よ走る

馬よもちをかくるべきみのとやされき。
〇伏去曰く又那謨薩達摩芬陀梨佉素怛覽。
とくる秘文あり又字おくして而も茶きこの咒
文よ猶ふくる事萬くさ雲谷禪師の古今の說を
予始め學海と呉もて勉ち一んを數へしをば茶の学海已よ
記して今日の我が身再生の身なれば学をも
予九と改ち。此意ハ此までおさほれ九人へよ
てかくるもとて予文幸の九人の旧里よるらぬや
うにこの誡の為也。て予世の中にてうけさろうなく。
あらべからふ皆せしが。一度雲谷の教を得てう。

行こそくそく恐ろしくなり。落堂の門よ狗う居
てもうかてもくバ果
よ恐るハ多ハごろしろど。事これんをくぐうしよ。
隠くよ世の欲染を捨出でく。天道ぼうれ給ふ故
ま也次第くよんもち大悦よろ。人よ譽られても。
又ハ謗られても甚く苦よるごれやうれ給まろ。
竟角して甚年平く。選り人よ名
しもそく時老くの古よ事三番目とこのしが。
打誠く第一よ選び出されぬ。ぱ付そや易道の
位仰かてうて禪師の古今の說を性よ。よごと見て
学くくろ。然もとどもと。我が身を者よ語るよ

願ふ事〻〻或ひ事に臨んで行ふべき義をうけても。
雲むしんおく或ひくとを報へたちくくと持ち入もぞ。
或ひ勇ひ人勤て善事をうまでも。口に非言をうまで。或
ハ破〻る門〻人大事を思へた。碎後ひ人放逸の事
おひ。此れよ困て善事二つあれど。ゑひ二つおひ日
も おひ。或ひ善ひ十おひて。ゑひ十一おひ日も おひ
一故已〻歳一支願一已卯の年まで十餘年
のひよごよのの善行やうくよ綱ひてまひ。此年を
多ひよおひ一ゆへ。此年庚辰の年。性空上人恵
空よひなごと請待一て。東堂の禅堂よ招くに千
千善の外善一て天地祖先の徳一報ひ奉ひき

此付文をおる願文を捧げて。二千善を初めんと
種〻願をおて。ゆる處よ翌年辛巳の年ぴやを方
ぐみれひ

予一善を行ふごとく。共一〻帳面一記ひ。其方ぐ母を
又予れを助けく。或ひ多人よ施一。或ひ鳥類魚族の。
生きてる物を買て救一。ひてひ。ひ母ひ為よ
てひひ一故。善をけ〻八十餘〇ぴと付ひ。
此の外六一日の内八十餘〇ふも及ふ一。更よ困
て実までの年八月よおて度八四年月よおや二千八
善行を満足せひ。此付八法上人を私宅へ請待一
て。ここよ善の外善を務ひひ。其年九月十二日又

衣くへ二石一斗ゝゝと祈く。善事一万條を修行仕ゝんと。乙丑又一百日を期して寶祚縣の令と言ふ事を仰せ付けられ。予此命を蒙りて認め奉て朝を七つ時より起き裝束して表向の庄政それ小性とも右の治心篇を持来て草の上より垂ふ。身んともみおしの若おしの恵ともぐそれ治心篇ふ紀し。夜ふ宋の趙抔よく敬やく此篇と草に載せて。庭よく出くまと梵天に向てと帝へ申とふ。是を毎日の格式とせふ今ふれよ或ふ何を方ふ毋

予ふ語ふやうハ爰ふ小宅よ参ん而ふ清淨よおひ助ふく。若事をふ。こなのふき若事も。救年と経ぞしてふ成就せふ。當時ふ御役ぐゝも事ふ。ふ堂部ふ同ふく相陽ふ。と役不のふれバ下も部」ふよをよなふて若悪若ふ。ふそハ一萬條の若事。ふふ発ふんとそふ悔こけふ。予も幸ふ此ふと事の毒よ思ひ一ハ悔くれゝふよふも予ふうゝゞふしゞふ。を救ふ。ふ一代の愛をふふ。ふ予ゞおゝよ来てふ立てふ。予ふ若ふよ向て右の字の毒ふ悔を救ゝふれバ一ぱ人の日ふめゞ程ふ節を滅ぜふ。一

叮ふ全かゝんとくう予此
くう一町よ引き二ふ四百七もそうゝぶ其の告を
冥く勘百姓へ觸を流して今年より一節を減して。
一ふ二百ともと定めうう。然もそも告よみんとされ
のこのうもそばまうとたそ
落ちうぬる者と思いしに
師まうみう。予甚よ嘉んでけるのを冥しうぶ禅
師の曰く善心真切なゝバ工行も萬善よ勝るのあ
ま。實抵縣百里一里四方の内の百姓みゝ一節の稗を
減し施る功徳されば豈萬告よ勝らざらんや況や其
中の告とやれバ天うう告げ来るう。何の疑うみんや。

とうられうう。予甚そ後も落ふしくんを重して。漸
ぜんよ告救多減して永ひの全根をふく。五畜ふ
おく衆僧二万人を供じて。右万告の件事を遂げ
うう。さて大の老人ハ予を五十三歳八月十四日迎の灯よ
ねとそうう。予敢く裏命の祈を投う豚ぬ十
三業の可行の頃もうく今年況よ六十九業よ及る
う。聖人の曰く。天難謀又曰。天命靡常又曰。惟命
不于常とうう。是こる生れつきの天命も。そくの
ふひふ心得て定うこもるのとを也。又曰。作善天降之百
祥為二不善天降之百殃とひ又禍福無不自己求
とうう。是多皆己まぶ行ひよ依く。禍とう福と

ふことこそつゝしめ眼逸そう陛
ぶきこるかゝんや況や予自飽まで味ひと脅く
思ひ初ることや今より於く
へ一定の者そう人命若し改むべくんば豈天命とうく
くんやなることくるへき天命の後に困て改まう宝るものを
知ことべき聖人の教に従て身をおさめて仍へざる者のこ
へるものそ方未ざ若輩者これぱなげけ如何と
信じて陥る者根を知べし。そて又芸方ぐ天より受
得こる命教に依く。若くこる宮に居るものおくこば常よ
落ぶきたる者のんりらとせこそ。若又行事も芸方ぐ
思よまくて行ることかゝ放くるも者をとらへざう

しう妨害などの来ることあやぶこと
べし若又父代ふ父母く極く貧之人のん
りらふるくこそ。若又人よ愛し敬ふこと我
をたの徳もなくして。此故せこそるかゝ
うなと思ひこば若又威勢ある権門と於らば早下通
退の思ひをなすべし。若又学よ又次学よ弁進して。
高世ふおくこ人よも知こるこそ。若下なれ
思ひ設くべし。そてをくこ祖の徳を輝そうるを
思ひ。をくこ父ぐ徳を補ふを思ひ。上こ天四の恩を報
ぜんると思ひ。下ハ家門の繁昌と願ひ。外こ人の急
難を救ふこと思ひ。内こ己まぐ私無こるこそ。

るをもつて日〻にこれまづ非を知りこれまづ過ちを改めよ一日已まづ非を知れば一日已まづ過ちを改めざれば一日退歩すると謂ふ同じく一日過ちを改めざれば一日退歩すると謂ふ是をもつてみるに天下にをぐれたる学者多しといへども自身も徳義を積んでもだゆる人も鷹く教ゆるをもてもだゆる不学く庸言のごうちにて一生をもだゆるをもつて八十翁の天命よりも外ふだん定めまつて天命有るをもつて

ざるう利根發明十分ならざるおとゝ思ふて。知ひ侮りて自慢をし貴人に残き者よ驕り富る人に貧者と驕るなど。皆盈の字の意と。謙に即ち謙虚のうつり。天の乃も地の乃も満てハ虧けくもるゆ日月星辰の運動水の東と流ち湖のごちひ其佗大山も消とうつり。江河ハ丘とうつなんど。皆目前のうつり。てハ人乃のう勝を悪んで謙虚を好ち愛とうもゝ人情のさうて云ふ及ばざるうう。但ち鬼神の害盈而福謙といふのごく乃ち鬼神ありてうつるうう。鬼神とハ非乃ち元て学宮のよりても。ゝ世乃の才智藝能の業ともよへを仰げバ限りなき者ゆゑ人乃ち仰ぐ者ハ必ず人をあるぞう厚むるものうう。よくもゝ化ぶ被ゝうつ。行者行ひとゝ人よ猪もてう才智藝能ありても。う勝の者ハ徳と持ち成よ。ゝ人うう。ゝと人と仰げバ限りなきうつをもつぎれ成ゝ恵人うう。ゝて才智藝能劣れる人ハ我ち不備法者うと知る故よ。自然ち謙退してう勝の人うゝ故ち才智藝能徳もてう人ゝ對をれバ劣れなう人及て有徳の人と仰ぐ。然ゝバ不徳凶悪の身うて有徳の人と侮る云ふ豈大いふる無くなるにあらざや。中にも富る人の家居衣服をゝ

ざり。遊興飲食ふ華靡を盡して貧きもの人よ騎
ものを羨ひて自ら樂ことをせ人くの常情なり
きども。獨卜筮の方りて大いよ慎ことをつとめ
世の人の富貴を願ふ大の務を極て貧賤の人
を見下てゐ下ざる處ものよく〳〵思ふべし
人皆けんおそれ慎ことをつとめ〳〵ざるものよく〳〵
より聖賢ものも鬼神と人とよ恐ことをつとめ
同滿招損謙受益とあり。山ふ滿んつる者ふ虧
ゐるのこと出來つる。然まても本と滿んつるもの
故我ぐ恐ことなくも損なく思ひぐ。我をどの者つふ行つ

ふ行てる不如意ふ至下のつゝしことて反つくゝ
鬼神を怨ことなく怒ることなくふ行ゆく故ふ損とをくこう。
又謙つる者ハ天地鬼神とくふ哀憐せつる故ふ行
事ふ行てもゐ益ふ來つるものこと出來つる。余も我ぐ善
き故ふ益ふ來ることハ思ひざ。是皆仏神先祖の御ゝげ
ものこんと讓る故ふ益と受るこう。是を滿招損謙
受益といひつるこう。又易の地山謙の卦ふ。
ふ皆吉つる一卦皆謙の卦つる故こう。予もつとく〳〵卑
學問ふ勉ふ在く。各別貝だらて謙虛つる者つう。且
ふ必衆人の中ふ各ゝ一二をりく現證を示さん。幸ふ幸ふの年の計偕

小私云曰。計偕くぐ花園の役人ぷ三年に一度で越へ參り用ふるものぞ次よみ及第ま成らぬ偕へ引つそる意そぷ計偕とうへく。嘉善と云処より予と同時よ上京せ諸生十人ゐり其中よ

〇丁敬宇八年も寐もかうへーぐ生ル贊るまく謙虛まう予費錦坡ま向く語るぷ丁敬宇八今年必ど石生されん費錦坡ご同く吳下の名士ぐ同く我ぐへく古へう謙虛とへく。御覽作へ十人の中に敬宇が如く惱て新くとて。眞實ーてまもの和へうよ内ばる者ゐりやぷ敬宇うあく恭敬順承とてうやまひたくーみて人をそそうらぞぷ小ん謙畏とて物事大事くーて。

人よ及うくぐうぷゐて乳くぐうーぷとぐくまる者らやぷ受侮不答とてぷよあるぞうそぐうーぷ先らんでも。其五報ぐへ人をそうらくを宜てぷそそらくを宜てぷ我らが如き者誰もろそそらぐーんやそうぐのまうと思ひたてぷーも云い用もなぐぷ甘ぐうう。如けるへ人ホの者とぷ矣比冤枉の助けゆ人故けか年決ーてけ度ぷ立身と存る也とひきぷ采して撰び出されて。

〇馮用士八幼年の時八佳へぬくぐの者とて好ーぐ予丁丑年京ふよとうーけけ人もちやう宿ふ居もう。予不忌後ふ思ひーぐ。於く交遊うんをぷ采

して。幼年のものどもに大いにお遠くて。
謙虛者にてなりき。

○李露岩が予ら友人のなかに正しく。諒なるものを。
予猶試んとて。ひそかに人の
設けしもてふふまろうめけるに。人面龜微
塵も變ぜず。至極厚きひとなりき。真實ふりひけり。
予ら日福のまるも。福のまるも。必ず表れて。
ふくく者なり。今我が足下を罵辱せしへ。實に試こと
ならん。然るに足下の謙虛。平生より十倍せり。天の助ある
必然なり。足下必ず今年若死なれんとていけるが。
果して予らひしく如くこそ。

○趙光遠は。山東冠縣のひとにて。童年のはじめより
おのく。撰ひ出されたるひとなり。その父嘉善なりし処の。奉
行となりてありくは。趙光遠も父に隨て嘉善へゆき
なりき。その処に錢明吾とていと。先生ありき。趙光遠往く
知るひとなれば。且つ自作の文を持ちて見せられ
ば。錢明吾甚だ喜びて。行の舍館も甚く。筆をとりて
文を教ふに。直して反古のやうにもてなし。
ることなり。吾底の者うべ。大いに立腹をべきよ。
光遠をおしも怒りの氣色もなくて。反て甚く
喜んで。甚だく直しの通りぶ改めてり。かうの謙
虛者故にや。その翌年乙卯にて

○壬辰の年予參內せしに。貢士夏建有り生徒に。其人ぐ〳〵甚ぐ卑下謙退して。眞實願ふ願たり。予友人と倍く曰く。花を天より人と福を與へんとするに。花は福を與へずして先づ姑を與へんと。其人のんだを變ぜざるもの者こそ。倍の者は勿論と實貞ふ姑やうぐれ。人の者は俄ふ此と亂ふもまつ。初父兄をも親ちぐ〳〵仏神をも敬まつ。寧信んよ。ふ極く天福をはぐべきやうとこれ果して選ひ出されたり。

○江陰の張畏岩は名ふるもの者にて。文章の名人のやうぐ。甲午の年南京の鄉試の時。文章を作て出し。極めて第二第二に下るもと思ひて。其ふ或る寺ふ寓宿して居まつ。其日よ出て榜をみるに。第二ふはなくて。張畏岩の字もなし。畏岩大ふ立腹して。其時の刺者を睫目の者とて。數くふ罵せり。時よ二人の道人を座ふ在て笑止就ハせんぐして。汝て喉をうるほさんと。一人の道人ふ取てうるに。汝行の故ふ斯ぐ急ぐとこれぐれ。道人の曰く。我を足下のやうふ愚文者にて。ぐ〳〵及第を望やまくぐとふ畏岩

ふ膜を立て汝ら未ざ一面の知らぬ人よ非だと存ようよ
予が文をうんうんする事へ敢あるべきぞ。何故ぞ妾よ恩
文うんうんとうんうんや。道人曰く夫を文ぬ人のんと繪き出
と者うれべ仏者のまや氣溫おうして。七情うるて孝う
うんう時へ其文自ら排てたる者うん。今足下の剃者
と思にせうんう辞氣を考うふ。足下の狗中甚こ孝う
うんぞ。其不孝不公のんと繪き出したる文うれで。
未ざ足下の文をうんざ引ぺ一言もうことぶの者うれべ。一言
そうとつれべ畏ぞ。足下の者よ非ずと
とぞてぐうと我をおけ道人大底の者よ非ずと
足下。係よ言を改く足下の今の禮をと侍免ありて願く

へ慈悲の教を垂ぬくと。謹ぐやくれで。道人の曰孫室
くくとくまりぬく。そそを足をやべ。それそ人の
身の上へへ一定の命數あり。足下は度擯よのうくき命
うんべたとい文へ拙くうふ擯よのうくき文
ぐうくき命うんべ足下の文まつをど巧なるもき文
まうてもも。擯よへへうんうんぐ擯よへへうんうんぐ命
ふあり。文まの若思へ二の次きうん。足下若し出世
よ志ありんべんのんおうて出みをし。畏ぞ曰已ぶ宝
の命ありれよ出安をも文まのよよ下よよ困らぞと
えうぐうんやや安んうて。先生行とう設
めよとういゆふや。道人曰足下家どや造命者を天

立命者ハ我也。とてみづからをさゝる者ありや。建立して成就ちてる処を。天より仰可して。其通りに定めやうある。ふやうにづけてる者ありや。實ありや。我と天と二つありうゐ非ざる也。云ゝ譬へ小家を大家ふ改め造るが如しかれを造る者ハ天ありや。大いなる材木を調る者へ我ありや。材木を用ゐざる者へやりうまの小家にて一生を過をさせうべし。自今以後若大家ふ改めんとてもる足利生来一定の天命ありや。若大家ふ改めんとてもる者もや。我本の用をさゝれり。材木の大小ふ依ず家も随ふ天より造り改めもの者ありや。譬へ

集ありや。足下の不平のんを改めて。謙虚の材木を持集めて。是までの彼を家を打棄新たふ集門高客の大宅ふ造り改めんと祈りありや。天命造化の大工豈改ず造りもへじ〳〵んや。天命一定としてる。某をうくて来をも豆をうくる処を一定としてる者ありや。天命の経るをうもるるこのハ我ふ一人の者ふ伝ふく。幾度も天より豆をう改めず来をうもまハ豆をう改めず来ず改めて仰可しもの者と知らるべし。天命靡常と聖人のつゝしみ給へる。畏岩田御教ふ従ひて極ふいたらうぐ〳〵謙虚ふ従ひて務むべし。拙き分愚

儒ふまじ物を施して陰善を行ふの類ひなど。如何道人曰く善事陰徳ならざれど施を施とみることも限りあり個人の受用に依る。自然しも施を施とおもはざれども限りなく広大なり。且くん乃受用の中に。謙虚の一事の如きは。ひやうびして世界の人ふ物を施すあるべし。謙虚ならざる人ふろうぐるのことくんばあるべからず。謙虚の人ふろうぐるのことくんばあるべからず。謙虚の人ふろうぐるのことくんばあるべからず。好衣と蓄ひふ山海の美味を含ひ家居ふ奇麗美人を召つかひ頭髪衣帯と飾華ふる物を懐中し腰ふ佩挟ひふ人ふ笑ふるとも耳ふ入ず。深奥ふ玄理を説ふるとも耳ふ入ず。己ふ利ある事を勧ひつ善ひつ

其外一切の法乃奥ふまで。一ふも人ふ負ふとをぐ争ふべくも情慳ふる心ふ細なるべし。其人の村里ふ及ぼす一天人地下世間の人鬼神ふの善ふろうを謙虚とつつしみ慎ふるの心ふ比べば右底の一切のつとめ付のうちを謙虚とつつしみ慎ふるの心ふ比べば右底の一切のつとめ付人ふうふ内場くと却歩して謹ふ居ふるの心ふ及ばず。其の恭倹を至徳と称めたまふ所以ふ。又道人の山林ふ隠れ佛者のこと衣一鉢の資道を行て乞食ふるも。此謙虚の至徳と倣ひ守ふるの二字を守よ者ふ外ふ非ず。味を含せて食ふべき身分の者。一日

甚く味を甘美の人夫鬼神へ懇り奨ろ〻成ろ。
又好衣と衣ろ称ぬ人の。一日好衣と著せぶれべ。
一日を好に衣を甘美の人夫鬼神へ懇り奨ろ〻成ろ。
ろ〻大宅ろを建ろ称ぬ人の。大宅を建ざろ〻
て小宅小住をろ〻一日でも乃至一月一年十年百
年ろてもそろをぢろ〻共をぢろ〻若〻
きろのをろ〻大宅を甘美の人夫鬼神
へ懇り奨ろ小我身の為ろ奢
をざきろのを止めて甘ぶろ〻皆甘美の人夫鬼神へ
譲り奨ろ〻奉ろ小成ろ者ろ。因て謙虚をもろ〻へ
下浅の費なくしてそ施行天地の間に滿ろろ

故ろ孔子も至徳ろ〻称めのようぞ。足下行ぞうやう
の大道を知ろぢろやぞ。行ぞ已をざ人の情慳を改
めぢろて。妄りぶ刺着をろ。
此を以て大いぶ感悟し。自ろ〻きれよ。
のんの垢を洗ひ捨ろて。若甘徳行日ろ〻修めせろ
丁酉の年にそ或る衆共談の義をろろ。不
圖甚ぢろきろ屋造ろの家ふをれろ。を内ぶ試錄と
て彼の及第の時の人別次第并の帳面一冊有ろ。
畏岩能ろ披きろれ。名のぬけそるをき行
ろ〻ろ〻ろふ思ろ殺ふろい僧の人ふ同ひけをぞ。甚
人の日天とふ称ろ〻人間日ろ〻不仁の若悪

盡く記錄をとるやうぜ其中に及第の一をゑらび二度づゝ考校あらぜく問ふに及第をくだせる者よりて。徳を撰ぶく答ふる者ハ皆帳面のつゞるやうぜ中ゑらく名のうけくるに及第をくだせる次ぜ否のゆきを削りさつたるやぜ未の方行て徳を撰ぶかゝる葉をゑらぶく指てこゝぜ二年以来身持ぜのよの名のみきと行を指てこゝぜ二年以来身持ぜのよの名のみきと行を指て其一行の内一波う姓名ものせらるべし。慎めうぜ困て此一行の内一波う姓名ものせらるべし。猶く務めもちうべしとつゝく果して其中の帳面の次ぜの如くぜ手代選挙二百五くめふ裁せられもちゝ右撰のゆをゑらぶくぜく頭上三尺の上ハ決して神明歴くたうぜ呼ゆをうけて右ゑれ趨くる

ハ皆我ゞ系行の名ゑ依て彼神明逐一見れた視そゝのかして賞罰詞を書處置ゆふことそう盡心屈巳へうくゝる者ハ甚ゝ愛とくまゝ者うう。此一段かくくのゆる仏神の御意よ合うんと志をして務ふうぜゞぬやうぜ真實ゝうう謙虚をもて猶ゝ徳を受ゆの基をゑ建ゑとゞきこと也古語ふ云有志ぜ于功名者。必得二富貴一とくう。ぜゝ貴者。必得二富貴一とくう。ぜゝ未代ぜ揚んと志をゑゝる者ハ純ぜ必功名ゑ遂る者ぜ又富貴ふ志ゞとゝる者ハ純ぜ必富貴のゝくゝそうと。ゝう。是皆行ふ処の志の総ゝ

会も天ふ通ととゝらへる信徒も志とう者の間断さくそうけまが必ず事を遂ることうをとらくるそう志へ発ぐが榊ふ根ののりるが如くうう榊ふ有て書言それべ終ふ不大まとうるが如くく故ふ出ざを求る者ハ盤石の志ととく〳〵念く謙虚うて事く物くよ有て徳を積て天地冥神の意ふ合ひ天命を造ることべ。今の及第を求る者ハ必ず物ようう真の志なるに非ず。但一時の勢向ふ依くく文を仕出ー誹諧ふ句の黙をみるが如ーさそうのうふの空うて出ざるもうたるもう。孟子の曰く王ゝ好楽甚齊其庶幾乎ばんい音楽ととう者へ今時の楽ととう

ちがひ古くの楽ちゃうもを音とうく虚空ようう弾ひてう。奥もとどう。獣も飛動ー冥神を感捨ー。天地を感動せーもうるほどの仁術うる者うう。古へ天下を治るハ礼と楽と二つの道ととして大平におうーまなう。然るふ齊の宣王楽とぬむ根ざうう。若ハ根ざーと書ひ育て真ふの古楽を好もやうに成てあうく。天地冥神の助けふ依く齊の國ふ四百餘劫の。京とうるふくとうかんとう。予此言ふ依ふく及第の業ふ有て も。但謙虚の一事うるをどうも。志を急ぐ〳〵ぶ書ふ育て謙虚を好むう其ふくく終うう天下の宰相閣

旬の位よ參るもくとろうんと存る也。○私ゝ云。自分の一人を謙虛の一行よく固むまこべ。天地鬼神及ひ人間の神魂を感動ととる趣を知〳〵しめんとて。此の孟子を引く牧ゝ言動の易の聖語の処〳〵結帰也。

積善 此篇ハ。吉事と約ふる易ふ云く積善之家必有餘慶ばんへ上の陰ふ云ゆる如く。善を積めバ必ど餘多の慶ひまる筭上の徳ふゆう。昔魯國の顏甫とつゝ人嫂三人持て甚内二人を孔子の御父叔梁紇の妻ふせんとて三人の嫂ふ倣ふゆうハ叔梁紇の先祖を代〳〵賢人多くして積善の家也。叔梁紇年老ひてうとつく九。此人の妻とゆうべ必貴きふをもらて宮ふ當べ。依ふる往くゞ行やとて在とゝ云娘ばゝ有を怨て叔梁紇の妻とゆう。やがて孔子の母とゆうれつゝ孔子の御先祖ふとつくべ。唐土の宋とつ國の大名とて有つ〳〵。第ふ國をゆづりて甚身ふ罪下となれり。甚子孫を魯の家ふる事をゝいふ按ゆゞ。結句ハ外ゝの臣下の家よりハ大いふるうちるゆゞ甚家の衰亂となりつく代〳〵讓虛ふして德ふ積ふゆう。叔梁紇へその子孫なる故孔子のゆうふる大聖人も生ふまるべきうやと

ふるーて。微在の父顓甫の物語りせられたるを也
家語とて書ありもつぱら傳もつぱら是等より
次下の帝舜の二事ハ積善の家ハ餘慶ありしを
中ふハ今第一の冠頭なるべし。故ハ今篇首ハ
出ぬとて孔子帝舜の大孝を說て曰く。貴爲二天子一。
富有二四海之内一。宗廟饗之。子孫保之。とのみて。
帝舜孝行の大善ありしゆゑ天子となり四海の
子孫の榮をうけゆゑぞとハ。さらさら積善の家
ふ餘慶ありと現證をとりく。積善の餘慶ありと知べし

○建寧の楊榮と云人。祖を稟家して代々
貧しくありしを家業とせず。濁れをとびてもく漲出て
或ハ浮木よき材木流れ來るもあり。或ハ家の内小屋
うづく流れ來るもあり。或ハ人ハ救ハ助もとびう
うと。其外のくく小舟ふ梅さへ。西くくの土用も明
ど。資財通具戸障子妹背の類數しらひ
もとめ給ふ。此の楊榮が曾祖父と祖父との二
人の親ふ孝救の徒おほかりしを。但身
をなげうつて人を救ひ助けうと。他の人々も
指ざもく。馬鹿者ぞと笑ひそしりしかども

こゝろをくし仕合よく終て揚栄ある父のはぢしめざる時節ハ餘りなど身上をもつぶさずに暮せしとの心。或は異人来て揚栄が父よ洛ゝ中ゝ汝が祖先大いなる陰徳あるゆゑ孫和と尊貴ゆゑんとつゝ揚栄はもとより及んで果して二十歳のはくやを及第して天下の極官たる三公の位ゟ升もとうぞ父ゝやれ及ぶぞ洛ゝるの祖父も皆祖父も皆贈り官して先祖を耀かしたり甚子孫一門皆歴々として而も多く皆賢者ゆゑ今の自免墳ゟこゝる塚へ彼もとう先祖の墓なり諸人のありなるゆゑ甚方ゟぐも知る事なり。

○楊自微とゝる者ハ鄜縣とつゝ処の宰の厳粛ゟ下ゟ吏よりて畏ごにんうて公事方ゟ付て偏頗うれ者なり。或時厳粛一人の罪人を捉ち。血ゟぐれく鼻ゟ満ま大。怒りの氣猶盛んうりれば厳粛曰く此者安ゟ法度をそこなぐわびくれ犯し甚よゝ我まゟ怖つ。我非道ゟ立後とられ非ざると答よ。自微頭を地よ付て曰く。傳へられる古ゝ王道のせゝゟ最寄くゟ師也ゟ民人皆正直うて法度を犯と者ゟまたなり後世其教へ方を乱故よ。百姓正直の道をゟらざる。民の法度を犯をハよよゟつくの罪なり。そゝ聖人の言ハまる罪人を吟味して假令罪ゟ落ちるとも先不仮とそゝよ

べし。さ柄こそ有て喜ふる毎ごとこうやうに
戒めつゝ而ふを泣や。怒りやうべきやう
らうさ様ふも覚へず言ぶを盡してやけまぶ厳
粛も道理ふ伏して惣うの氣和ぎたうぶそえは
自徴たやうのんだての者ふれぶ賄なぶ云決して
受ぶ。家又え来貧なれたぶる牢者の内して朝夕
の食物の乏き者をぶぶふくぶ給ふぶ食物を送う
て憐へごくめうぶ或ふ自彰ふ来ふ牢者の者救人
やうぶ甚ぶ飢ふ及ぶ招ふみなうぶ自徴ぶ家杉節飯
米乏ふして罪人ふ食を與んとそれぶ家内の食お
ふーつぐやんと其妻ふ相談しそれぶ妻の曰く罪人

ハ宿の近き者たうやふを方の者うやふ自徴ぶ同
抗とふ知うふ来ふとう彼ぶ飢つれく殺ふ皆菜
妻も哀をとりふして
て隣ふたまて罪人ふ食
皆ふのやうの慈きうぶ
てうぶ勢ふ守陳ハ北京
趾ふ南京の吏部侍郎
ぶて一人ふ刑部侍郎と成り一人ふ四川の廉憲とふ
ふうぶ而ふ四人俱ふ名ふと称せられぶ各うち持
て高官大祿をとうぶ今名ふ楚亭得うぶ

甚子孫なり。

⑪ 昔正統年中に。福建の鄧茂七と云者亂を起し。汕縣と云ふ處より。延平府までの府縣。悉く敎面の同心爲りて。此に隨ふ者甚多く。黨を結び。鄧縣の張楷と云ふ人を仰せなされ。謀を爲さしめ。鄧茂七を後詰の餘黨多く守りもおさへ。搜殺さんとの事と。大軍を以て。謝都事と云ふ人を仰せなされ。討手として。向ふ者共を。悉く誅伐せられ。又白き布の小旗を。敎面の中

の然るべき者を招き。諭さく。汝等も思ふ處あり。盜賊よりも。良民と云ふべし。我一命に代らんとなり。公儀より及ばざる者なるべし。汝一人は悔悟の足非よ及ばざる非を改めよ。今より非を改め。本の如く良民と成れば。其者共の門戶を。表とたてて。其者共を敎を用ふれば。其者共を敎を用ふ。もし勢時の同心輩の。鄧茂七が已よと。悉く皆大方の軍兵どもに戒て。同心と云ふ疵を付

者へ曲事たるべし。況人を殺たる者へ殺て許をるやう。ましてや白き小旗のごとき家ゝ老若男女を擯ぞふるをおそるゝ事に助られく命をつなぐ者一萬人に及べうとのうの陰徳故ぞや謝都事が子謝遷へ及第の第一よろこびて逐ふ宰相の官ふ升もう。其孫謝香へ及第して探花郎とて第二甲の科ふ升まうの又同じ福建の林氏の生徒ふ甚悪係き老母あり。ある方ゝそう園子をひらふ仍て貧人乞食等ふ與へたり。或は異人ありて老母のん銭の悪悪んう。名聞の施行ふ試と思ひて毎朝

来て数ふ七つ往づく我ら食へうぞ此の如くそうる事三年ぞうのうるもう。然を九十老母もうしも犢氣色もくんうく與くなう。彼の異人老母ふ語て曰く我を三年のうち汝若しも報なくべし。汝若しも報なくべし。汝が墓所ふ凶事の殺所の後ふ富貴ふ榮ふ孫の処ふ葬るべし。汝ふ孫の官祿をうる者。麻の子一升の数ほどとくう栗して其高座其家ふうぞ九人出せして大官ふ升もうぞ後代ゝ富貴安榮ふうぞふ今ふ至ても福建の林氏の一門とさくんべ及第せざる者をとうるをと誰ふ仍てうさくへ

○馮琢菴父諸生なる時冬日早朝ゟ起て其邑の學校へ參らんとして道ゟ一人雪の中にすべり倒て伏臥なる者有り。不便のことゝ思ひ己が着たる衣服を脫て着せ。肩輿をやとひて家歸ら令めなり。後ゟ其夜夢ゟ神人來て告て曰く汝一人の命を救ふ是本汝と義理ある中に非ざれど。汝が誠心ゟ出ることなり。我甚褒美して韓琦をたくわへて汝ゟ子をもうけしめんとなり。此法生後ゟ子を生めり。其名を馮琦と名けり。生長して大史の官ゟ升もり。其官方も知る所の馮琢菴なり史記ゟ

私ニ云韓琦ハ宋朝の賢臣徂徠公の事也古文眞寶の中の畫錦堂の記ハ此人の賢德を述たる也。

○台州の應尚書ハ壯年の時ゟ山窗ゟ籠て學文をせり。其處夜ゟ更ゟ鬼の類集てやまざれバ人を驚々れ共。應尚書ハ氣象者ゟてをれざりき。或夜鬼神の妻ゟて美女ゟ來ゟ尚書の家の婦其外絶國へ行きてすくなゝれバ尚書ゟ久くなれバ尚書ゟ强て他へ嫁入させんとす。此婦人貞女ゟて合点せざれ共終ゟ其姑の強ゟ依ゟて他へ嫁入をくゝりて死をするゟ尚書ゟ

まべ我等已く入り代りて妻とうべしとうまう。
應尚書はくぐ笑くく不便のるふ思ひ翌朝夜の門
ふ此彼を頼こ。自分持ち参の田を賣りて。白金四百
をおくうさて。其いまたるくの偽状くと得ず。白金四百
を對しこめて。返付けねるべし先ず金ふを指こべ
作なくく書きそ。そ永へをーなう。彼翁姑対をひう
きそてくるふ。甚ふ跡の真筆に非るを疑ひきも。
大切の金ふを得るから。我ぐふ相違かりるまでと
行ーて。遂ふ嫁入ぐことを止めふう。果ーて往なく
そ夫化ふうなりて。年の如く夫婦となれうう。
而も金ふ状とを送るふ應尚書ぐりうふ出でる

るうとべ外内親ふともふ。終ふ行者の為とうまるを
知うぢうう。應尚書又或夜鬼神の語るをきけべ一鬼
の云く。汝学生めぐ一大事を妨たうとべ又一鬼の云
く。汝行ぐ其学生ふ然ふ。一鬼答ーて云
くされべこそうふ思へども。天帝うけ学生を陰徳の
尚書と命ぜーれてう。我等何ぞ行とてもざるをお
んやとうう。應尚書此とをきてそ我此度一人の
婦人を助けてう陰徳ふ依ふ後く。やぐて尚書の官ふ升べ
き果報と與へふうさうてハ因果報應の道理ふ
ぢぐく畏き者うそとて愈善事を行ひ或ハ凶
年ふ米穀を施行し或ハ親類の内急難のもと

そでかれべ萬方ふる持て救い助け。或ハ人〻ふ理非
道を言いうけ為ふられ。是皆我が徳の為き故
ふふて。おも怒ふべき受順へう。甚ハ厚實裕なる
る皆ハ類ふう。其後終ふ果報神の語みたがふで尚善と
云ふ宮ふ升しなう其ふ孫及ぶる者今ハ累〻となり
○常熟の徐鳳竹が父へ安西ふ大家〻ふう。一年大
いふ飢饉なりされで。我下俗ふうふの仇徳ハび
なく〻みうふを。おふべ許〻ふられ外〻の爵百姓
るべくも。色〻勧諭て皆〻許せふう。甚ハ又我が発
をつ開く。米穀を出して粥を施ふ日〻ふう。然る処ふ或
夜鬼神のふと云ふて其門ふて唱へて曰く千不誰

萬不誰ハ誰徐家秀才倒做了舉人一郎。ハ云う此意ハ
徐鳳竹父の名ふ依ふく。尚多ハ公儀へ召出ふる
るなう。此ふ多ハ公儀ふも未ふ御存ふ無き内ふ天
ふう定めをかるられべ。倒做ふふひふ此ふ千
ふ一つもお違ひとハふて。不誰不誰とハふるふて。
ふう。此の如く唱ふる事毎夜のふなうき果ハてハ
年風竹郷選ふ中れう。是ふ依て其父善徳を積て
怠らず。或ハ橋なき処へ橋をとう。或ハ狭路へ廣く
ハ険路へ平ふう。或ハ傭ふ施し。或ハ諸人ふ出會て
んをふして。若事を修ふべき旨を教導ふう。其
後又鬼神の教ふと云ふて門ふ小唱へふく云く千不

詎萬不詎徐家ノ壑人直做到都堂とゝへう。風
竹渠して大いふ出せ
撫使とゝ官ふなるそ
○嘉興の屠傪公とゝ
しゞ窮ふ子人ふまだ
理非の物語うどもし。其實情を窺ふ罪なくして
囚られゝる者若すくれ公事
どものゝ
ゝ
ゝ

へつらひ。甚役人のさばき方の理非を吟味なくバ。
廣大の御慈悲なりんとつくり。尚書もる極むと同
んしてそ仮をそるへ奏聞をて意ふをそ儀ふ定まて
て。列傳公も太座の西きくなれバ減刑官のへ救ひ
そらうをたう。傳公或夜の妾ふ一人まて告く曰く。
汝ガ天命なる一人もるし。然ふよ今度汝ら減刑の奏
聞深く天心ふ合つ。是ふ因ふく天帝ふ汝ふ二人の
貴きさまを。與くのふるりとつう。其後應壊應坤
應埈とそ三ふせれく皆高官とるれう。
○池陽の馮を守なる七人とそう七人目の子馮信
えハ。平湖とゝ処の袁氏の婿とるれう。我等も袁氏

うて同姓の故とや。此信えと我等ガ父とハそ親し
朋友るるき。然ふよ此信えハ博学ふる才の人て度く
選挙せられたぐの宿因とや。ふく官ふおつく
るをゐざるき。平生道家とゝ仏家とを仰せ人へ。
或ハ仰湖とゝ処ふ杜んで不帰一寺の内ふるりて。
寺内ふ観音の像なりしる。堂もるく雨露ふさゝさ
まて蘇まる極の風情なりれバ。住之羽し畢て匆々
堂建立の志をう。刹中萃を拂ふく今十あゑ出し。
住持の僧ふ與へ此金を以て観音堂を建立し此尊
像を安置してなるべしとふいられバ。僧の曰此大像
ふ彩ふる堂をるふ。十あの金ふて功を終へんるの。

来るーとつひくれば信之が箕の内を拂ふく布団を
と衣類七色を出して與へなり。信之の僕の曰七色の
門廉の袴へ着して物うち走く御不自由ともなり給
はーめとつくへ信之が曰く。菩薩さへ雨露ふ凌ぬなど。
我ハ赤裸にても苦しからじとつひて皆ふ與へくれ
べき其の侭涙を流して曰く。今を捨衣服を施さへ
さへし難きるーも非ぞ。貴公只今の御一言ハ世ふも
有難き御志にて作つるも甚だ忝を拔て普請
仕らんとつひきが往れく結構ふ出来せる出来の後
又信之我等が父を招同道して茶まして系泊して。
一宿せられそ夜を書の伽藍神。信之が夢ふとくて御

して曰く。汝が信心の功徳ふ報ひてふく孫く官禄ふ栄へ
べーとつくふ果して信之が孫ふ至るまふ非ぞと申すのつるふ。

〇嘉善の支が父ふ。是又公事方の役人なりーが。
衆人の内ふ幸無ーして斬罪ふ宛まる者あり。ふく
哀ぶふ思ひ。行そぞーして助ーてよくとつくる。衆
人ふ。此様をとんりーふ。ふく
ふ思ひ居つるれそ妻自宅屋へ含を送り来りそん
べ。衆人妻ふ向くまふ。ふが夫の志の厚きるーを悟りて。ふ
涙を流ーて妻ふ語つるふ。我を方ふ一生涯乃
別れありそやうハ此日我ら宅へ又公を招きて酒着

紡んざろふお洞へ其方身を穢して父公に事へよ公若し其方に意あらばと我が命或ひは助るよすもがなぐらとそうそ妻も夫の生死の大事なれば泣く〳〵夫公をそまの如くくすくりてるしけを其父公えうのくだくのくるれば申く其妻のくふ従ひぬとぴ飲食のみすてゐうそうされたかをそうしてそれおく〳〵絶ふ斬衆をのがをまちなう。其者窄ようち歩そそくまく夫婦ともれて父公が家こもり。頭を地こ付けて四くぴ公の真ふ我が一命の親ぢぴ大恩行をれろ報ぐをまんとそ血の涙を流して一禮を述ぴそ早速そぐらそんぴ公今中年も過ぬくれば我こ若輩者なぐう娘一人りてう。我が一命を助ぬくる陰徳あもべ我が骨肉をわけなる娘をまくべ必ず父公も陽感通の理報かとなまう作とこられぴ父公も無く一子を残ぬおうそうぴ咸通の理をとくよるふぴこやぴて本妻の禮をとれ迎えるもう後果して支立てうまを生ぴ二十歳こうて甲第ふ登り翰林孔目の官ふをうぴ支立ぐる支高ぢ支高ぢ支禄代〳〵皆あ〳〵れく。大学博士の官となれうぴぐろ支禄ぐる大倫も甲第ふ登りぴ笑ら結汝ぐま乃

あるべき事なり。

一　凡そ十條の如き同じかるべき行者のよき事を行ひて陰徳と積徳との別ちを云ふに凡て善事を為すを我のこゝろよくよしと思ひ人にも云ふ耳の鳴るが如く自ら我故に陰徳を如耳鳴と云ふ。我が為たる善事を人の知るも知らぬもかまはず。但善事とさへ思ひ定めて務て怠らず善根ふかんを用ふくはゞこゝに進んで務てゆるべきなり。陰徳ともせよ積徳ともせよ。積徳と云ふ事は人に知られずしてよきことをつゝしみ行ふをいふなり。

れ實義に務行ふべし。諸の災難を滅して諸の幸福の来るの基なり。早速多くの人に善を為すに易し。世間の人の身を害ふなり。日月順風に帆あるが如し。又金銀の富ある者は善を為すに益多し。錢ありて為ざるは雖ありて泳ぐに異ならず。百善を為ざる者は人と顔を合せざるが如し。此を言ふ。この善人とてそうしぶそて又事にふれ縁に従て善を為る事多端なり。今且く其大畧を云ふ。十ヶ條

なり。第一ニ與人為善ニ二愛敬存心三成人之美
四勸人為善ヲ五救人危急六與建大利七捨財
作福八護持正法九敬重尊長十愛惜物命
第一與人為善とハ言ハそれとわかるゝ事
ぞ。くくの中へおゐ難く。仏とゐく誘導するなり。普賢
辭とつゝる聖人ハ。道ふ居住をゆ。問奠を捕て高
貴よとゝる者どもをこんゆ。おゝき者ハ老人をお
ひ。弱者ハ弱をあはれみて。奠の多くなるやう
てゝうゐれべ老人とゐゝ奠を捕ることを
能へざるき。普賢辭不侵のごとくゆ。自ゝ者ハ
ふうらまぐうて。奠をとゝるゆ。老人或ハ弱者ハ随

分奠のほしがるゐへ教へてやらびきて。奠を多くゐ
らしめ。自身ゝ奠のおきゝ処ハ。又其大勢ハ傍ゐる者の
ゐまゝをとて者ゐ多ゐ。ゐゝ者の中ゐ。ぐゝ長
らとゝ者ゐとう。又其中ゐ普辭の真似をして。俄
今ゐも儀ゐつゝる者ゐゐ。ゐゝ大形ゐ
ゝ者を誉あげく。部くの者どもを二励ゆゝゐた
のしくゝべ一年ゐどの後ゐゝ処の老若男女ゆゐ相
ひぼうて普賢辭の徳ゐ。ひろまつゝとゆ也。普賢辭或時ゐ。
在通よりて耕作をゆゐ。又陶師の家り居ゐ処ゐ。
居住ゐゝ人ゐも。ゐゝ。ぼゐ大のゐ。ゐゝ。若ゐへら

いきこのくことなう。聖人の雑言して教のつゞ辞と不
足らかうもうくれた忌む痛み知の者へ能くするて
行ふの能なざる者故。自卿
るう。足利與人為善也。凡人と共ふ心と處して善る
ふ志も者も。善為べき事かうべ己一人のうふ
せざるてくくれから勧めて共くに為とべくべ己年
うとなうとて。妄こ人を侮べうべ。善事を為せべて
人のあるのなるをとういわうべ。己藝能あれべ
とてくよいけらかし悔しがしもひべうべ。己才智かう
ち深く藏して人とてらうべうべ。人の過失かるとえ
てハ能人へ廣く寛顕せめ。其ふよ或

佛の罰神の咎或ハ主君或ら親の権威なとを
借ふ取て巧ふ誘ふうふ。
しいくも善事を為をうんべふ善ふ
人よも吹聴してそそやをうれとべくべ。
をそうで。日くの言を出ふ事を約ふも我身
のよを指をてなれめまでも。廣く世界の人くの
師匠となうて。二世の悪知を成就せしめんと祈る
べし。是を天下の大人と云ふ。
第二ふ愛敬存心とう。愛とう
のるう。存心とハ不形ふよ身ふ務行ふよ身て或ら
礼の節をと

或ヲ財寶ヲ賑ク施ク私ヲク。或ハ文章政務ノコト。此ノ
ノコトヲ君子ハ勿論ニシ及ベド小人ニモ亦或ハ名譽
ノ爲ニ或ハ嫉計ヲドノ爲。假ニ勢ノ有ル者モ有ル故
ニ。君子トヲ小人トノ爭ノ此ニ於テハ互ニ勝劣ナシ。但
君子ノ思ノ如クハ。平生内徳ノ有ルヲ以テ。孟子曰君子所以異於人者以其
有ル者ヲ因テ存心也トヲヲ此君子ト小人トノ分ル心ノ有ヲ
ヲ在トヲヲ。君子ノ心ノ有ヲヲハ。仁ト禮トノ二ヲ
ツヲトヲヲ存在ヲヲ。仁ヲ一切ノ人ヲ愛ヲヲル心ヲ
禮ハ一切ノ人ヲ大切ヲ思フヲヲ。仁ヲ天ノヲヲ禮ハ
地ノ法ヲヲ。天地ヲ一切ノ人ヲ大切ヲ愛ヲヲ。

親疎貴賤ノ差ノ無ク。美ヨシ醜キヲ偏頗ノ思ヒ
ヲキ者也。ヲテ古ノ聖人トヲヲ。賢人トヲフモ仁
ト禮トヲヲテ。天神地祇ト合體ヲノ者故。
天下ノ人ヲ愛敬ヲヲル事ヒヲヘンバノ蘭ヲヲ。
天地トヲヲルヲヲ。ヲレハヲヲ聖人賢人ノ地位
ヲヲヲヲヲヲ。ヲレハヲヲ一切ノ人ヲ愛敬ヲヲルヲヲ
在ヲヲル時ハ即聖人賢人ノ御ヲ仕ヲヲル人也。廣
ク論ヲレヲ萬物皆我ト同体ヲヲ。而モ仏ノ方便
ノ説モ。至人ノ明徳ヲヲヲヲモ。皆此ノ物ヲ
繋ル事ナレヲ。吾輩ノ足ヲ踏ク。天下ノ人ヲト。
骨肉兄弟ノ如ク仁愛

を施さんと欲するの志有るを云ひて美き者
第二成人之美と云ふ人の為ならんことなり。夫五ハ豚ざるの如し。若
人の内徳ある者志有るハ助け導びくべし。若し
助け導びくべしと雖ども若し人の為ならんことを
る者をとゞめんことを欲つ美つもそ。ふ若し人
進め入るゝ或ハ化よう妬嫉を怨む人のと
有るべしと雖ども我も一先身を穢く
を中るへ入ゝ百方ニ方便して過を改るまりて感悟

さゝとべし。大度人くの人情くて我が好とこゝろ
なる人ゝ。憎厭者也而ゝ若人ゝ小世間ゝ若人
ハ多し。多勢ゝ多勢なれバ。若事を為んとするに不
若人ゝそれ人ゝ妨らるゝ故ふ。人ゝ十人ゝ百人ゝ百人ゝ多くハ
果る者ゝ。偶百人ゝも勝まして一器量有る者有ん。
有るの人ゝ。縦ひ謹ふかゝ者故ゝ我の異見ゝを
ついたてゝ成べき若事も妨らるゝ者ゝ。但ゝ小仁大
長者ゝ云者有ん。希なる者なれバ。仁人
ほき人ゝ。長者ゝ。大度ゝ大量ゝ人ゝ。
慈悲ふかく大人ゝ。

又は我こと誠こゝろ者こそ限葉とて。然くらゐへて教へ導者あやうやうの人を万人の譏そも。嫉とも。屑とをごる故。但我ら身の若ゐを逐るのみかは。一郷に在て一郷の人のの悪人をいうぐさを一回に在て一回の人のに人を生ぜしめ。福事をいせしめるう。第四勧人為若しくハ。凡一切の人のの底を尋てん。もぐ。若人のこゝろ者ゝ一人も。こゝろ者そうにてのの悪人くても。丹の中へ落入る赤ごを助けざるものの。こゝろきこゝて知べし。然を今日それくの家業を奪てしまくゝ若事を実くも耳に入くもんふそのをぞんこそみても身ふ労めごもて一生

を明暮するやうにたくひ人ふ事へくせをるごとのもの。又妻子のれどかりつくぱくゝ化生然を没る者も。一旦若人の方へ撫をみるうおごせびん。即ち安ごうに放り。然不足のんも止こゝ又指尚くの貧者もうのこと若よなくゝび。結句ハんこと。そうく身とも取り乗しゝ。思ひの外ふ繁昌をする者也。然を大悪病和知の者へ此の早速を写をるるなくゝび及て近ちをるやふ思ひく。一生あうへ出るるなくゝにるるう。又人の世つる業ふなく。始うに貧銭をる者へ。貧銭ふ馬洗るう故ふ甚きこゝる者るう。但始へ兎も角もせゝ者の中須うに大ごる者。貧事銭ふ

ふくろう○ふくろう俗ていわく梟鳥をもさぐりぬくの深計を企くわんをえたをさうんとしぶ公事公儀をそして人と雑談をうけ。後ふくろう天通を怒こぶ神を挑撥し新類朋友乃好きくまでを悪口しぶ狂走者多しぶをして惑わふくろうをふふくろうを激ふにをてぶ若通へ勧入をてぶふよ弱たるくをぶふくろうが如く恐もこ愛こうくを浮覚こうが如くふ發得さんぶまさぶ。韓退之曰十時勧人以口百世勧人以書とくぶ意ハ書物を仮つくくを勧ふ百年ふ年の後までも多くの利益ありぶ。

をいうくんを勧ふ八時百のうんこさんたたくんぶ。病のくふ書物をうんをせてぶ彼ハ煩わぬうんこさまこべきまふ書物を仮つくく教ふ八實ふ百世の利益うぶ然をれ己ふ病を受たるくんぶ書物をうんをせんこさるハ決定人をとうんて得をふ直ふ脉をとまを與へく。療治を加らが如くにをれく教へなどんべかうべうぶ人くふ八多くのまれつきなり着こうをべ其物好ふ後てぶをうんて苦ふ勉うもむべしぶの教ふ書をぶふく。後世を教ふうくぶもべうぶまも百百のうんこさんぶ然りとて日ふのの病若ふ

へ非ずなりぬ。されど我らんの切なるまゝにもぐくいさめて先王の仁のふさろうてより〳〵足を我が才覚と徳義の足らぬなるを知らで誤りぬ。ぐ〳〵かうそもこゝろを改たるまぐべし。

第二救人危急ところ人のくはぬせつ一時の難義を救ふ。或を不言とも不相法にて小厄始より逆たる難義。或を非理に撰適をとりらるゝ時の難義或を一時の了簡ちがひにて御法度を犯しぬる時の難義等皆是等の類常〳〵なりぬるまぐべし。而も人の為目をうて心障ぬ神に崇るまでにて千人が十人まで痛通迫ぬる者ぬぐやうの時分節りん我が身のこと引更て彼此大がいに謀ぬめて言を尽慰諭。それ式のるをなどのぬぬんとらいるぐ〳〵。そを人のん苦を察うまもしべ〳〵。甚だしてぬ入まて救助べ〳〵。崔子曰恵不在大赴人之急可也。此意ハ人ん労情を施さんと志さと者ハ必ずしも大ふしへ限らぐ人の急難ぬりるをうて身ぬ引受て救ふへなりべ。我ぬ貴ぶ所ハ人ん労情を施さんと志さと者ハ必ずしも大ふしへ限らぐ人の急難ぬりるをうて身ぬ引受て救ふへなりべ。我ぬ貴ぶ所ハ人ん労情を施さんと志さと者ハ必ずしも大ふしへ限らぐ人の急難ぬりるをうて身ぬ引受て救ふへなりべ。我ぬ貴ぶ所ハ

小者の言とこべし。まへ冥加の人の中にさのみ若
人くる非そして或ら生れ付きたる無言やきこて人
の急難を救或ら人ふ忌たら指つめ擾をくて雖
妻を救或ら受けそうでをして好うぬ者かう
の者。大まの意気地ぐくうて役りなた人
とかくまし或ら刑罰もれ
を治めて安んせそなの外ふ大いそる若根を
為し而も其身ちさのこの若うれ者かりか
ふうの人後に或ら。不そこの金り入けをし或ら富る
人ふそうれ或ら發明る好子を生。家余長人
そそそふかう安来ふ強うと遠き者多しのて

若者もあるで仕合の好人ら。古来ろう人の怪疑
るなれ。かくれそる若根のかう故とそるれんの
付らば救そべし。但人ふ身の若こうふの若こそを
救ふ。人の知ぬ大若そ。若しのもの。
ぶ仕るそうほ文意能かこ
んな仕るをもうそんど思くふ倍この恵救を
交ること知るべし。
第二い無二建大利とふ。大きくらくべ回或ら郡ふさく云
へば村里ふ於く。其人の力相応ふ。くの務ふ成る
ものをそるそうる。或ら吐血きれりふ渠と掘。
或ら堤と築て洪ろの侵そうし。或ら路橋を修理

きて往来の人ふ仮りしく。或ら乞へる人ふ一銭を與へ又ハ宿を借し。或ら異ふ客の時ふハ我ものを出しまきく。或ら改の多きを踏うふハ其の杖をとりそへどもとらのるまゝそ。然ら此等ふ准じて知るへし。ゆゑに一人の力ふ及ハぬるものハ多くの人とともに合せて是非逐果べし。ゆゑのるをもるく人をそゝのかしてつとめしめ。或ハ人ゆゑ持ち出さるゝんどいふく。逃ぬる者なり。真ゆふおしもらるゝとも。ゆめ〳〵我身の苦労を顧ざる。但人ふそらるゝとも。天道の御よ仕をもて天道の御ふ仕をふ入んとおもひて。まく疑ひ怠るべからず。

第七。捨財作福とハ佛法の萬行の中ふら布施の行を第一とふ而も此布施の二字つゞめていへハ但捨の一字ふ帰さる也。因て條目ふ施財と云ひたら共ふ。仏門ふてハ捨とふ施ふとふ。異ふ名をとうぐ。音ハ味をとるなら。眼耳鼻舌身意。の六つを六根といひ。色聲香味觸法の六つを六塵とゝゝろ。人間一切の働ハ此六根と六塵よ極るなり。禅観のふの布施の行とゝハ此六塵の欲ふと捨ふぬそこふ我身の六根をも空なら者ふして。我が物とせず。捨つるなり。扨又一生を立ち越てこゝへ仏法の一分若万行の功徳をも。盡捨て為ざるなり。此生ふ果の外

のおほなり。今論ずる所内有備善の中の施
のごとなり。其まゝふみ〳〵人同ら衣食して食を續
者なり。衣食ハ財そこれおめ〳〵ハ財ハ人界より
ハ大切なる者なり。ハ大切と思ふ所を捨て施と論ず我身
の慳貪の非を免まと他の方へ貧若と救ふなり。
捨の字の意ハ別へおと投捨たる意ハ陰の義と
なる意なり。故よ初ハ勉〳〵勢めみく紀ゆうなれバ
易ひ熟して報應の味そ知と紀ハ修行のん自然
と進む者なり。○私曰ハ中の小乗の法門ハ塵を捨ること仏法の
中の小乗のごとく方ハ若方行を捨ることハ権大
乗の法門なり。實大乗の法門を捨るゆゑ。

又みるゝ所あり〳〵。亦ら捨〳〵亦ハ云ゝ也但向
の總要の楚文を唱へて施をべし。自實大乗
の意ふ含〳〵。一紙ま淺の小者も大者とるゝ
べきなり。問〳〵曰〳〵捨の
〳〵る意陰の事をとるんして施をべし
る時ハ全く是陰徳なり。然ま陽よ物を施を
ハ名事ふハ成りぐゝにや。若たゝハ非と捨の
字よ二ツの意有り。施したる物を惜むんを
きと捨と云ゝなり。是を測へ投入たるごとく
物を施して人ふ拳らんと思ひ。又ハ禮を
言ハまんと思ふハ測りと同じ。

ゑ此甚放したる物を再び用ふるを意
味故ゑ。此云ふて八切徳至しといふよハ
あゝ孫ども。恵の行しの人ハ合ゞて
国く陰の業をとる云ゑ。此を捨とる
云ゑう。扨甚よふ随喜のんを起く施をハ。
弥重き恵ふ含ふ者ゑ。決よ陰徳の捨と云
ハ。陰徳刈ち捨ゑう。無ふ陰徳の捨ハ丈の
如くんふ甲むまし。さまゝさふハ思ひ
まじ。扨を言ハ也ま。ゑ陰てとゑれ
るゑ陰してとゑるゑの大徳とゑるわけハ。古

語ふ。天聞如雷天見如電とて神の方ゑく
深くゑるゑゑ放ゑう。中庸小莫見乎隠とく云
へるも同しんく陽徒と陰徒との不同ハ所れ
ども。捨の字のんを用る故き八同しゑう。
貧女の一灯ハ陰にして仏書ゑるれ邪を
第八護持正法とく八儒佛の教を棄て正法と
云いたる者也。此ふ法を徳と積こと天下を治
めふ者を勧恵を懲しこと二世の悪報を成就と
るゑれハ人くにゑく眼目の如くなる者
なれハ。む学敬を盡とく甚よふ非社仏
図ふ細くの木像経典の類ふゑゑまでも

若破壞小及ひ宣く修理を加へ威光倍增
を行ふべし。経文に一つの讐あり。藁をおん
と思ふ。猶を猫を殺すべし。藁を腎らのごとく
を杀すをとをするが仏教ハ後世の法
るれた。現世の罪をも修行をれハ。
現世の罪をはらひて後世の善をまて
をはらひてと云辟のごとく後世の善をまて
小ハ仏法傍の三つを三寶として三つのたゝ
とゝいふぞう。此三つを大切ふをもつを別して
護持正法といふそうぢ
第九敬重尊長といふ國ゝてハ主君永ふて八

父兄を始とゝ。位ある人道徳のうき人学
識の猪もつる人年老つる人を八皆くあが
め敬ふをいふ。中ふも永ふ有て父母ふ事ふ
者八孝生ふ。我ん底ふ添く親の大恩を有
難思ひ。さて身をれ事ふも言を以慰れ
ふもの。ふても父母のんよさゝねやうふ
んぐくべし。又年老くてへさびしのみしハ
老く例を離をねやうにをべし。假ふも窮
屈なうそぶと思ふべうゞ窮屈そうとそを
ううぶれバ癖ふなりて窮屈ふをる者なう
ぶぞうのやうに思ふくまをくバ又癖ふ於て

窮屈ふるきのこゝろ父母の喜ゆふ嬉く樂こふる者こゝ老こゝ病こゝ死こゝ性こゝて自然こゝ柔和若水の人ハ一切の若神を右ふ立備く守護こゝ者こゝ此こゝ當務ハうげひなこゝこゝを第一こゝこゝ古人の言小事君如天こゝこゝう。君の見つまつ通ハ見徹なう。上ハ君よこを敬下ハ百姓こゝ恤。為政刑賞ふれゝきハ宜こゝ本の盛徳こゝ

目ふこゝを第十愛惜物命こゝハ殺生こゝ戒こゝ一切悪ハ仁なう仁人のんなう。器神のんなう又く天乃ま。此天のんなる仁こゝ命こゝ梅の實の内の柔こゝ肉こゝ梅仁こゝ名付こゝ者なう。桃仁杏仁こゝでも皆永く又人の身の内ふる名こゝび生氣の安仁処の病の名こゝ不仁こゝ。其な名なる処こゝ八命こゝ

とて、そて名にもなるなり。況そて仁乃まそ
物乃令なるを知るべきなり。是をもりて
孟子も惻隠乃心なきを人ふ非ずともいふ
つゝ惻隠といへ乃まなるべそ仁乃人乃
んなるもつゝぱら故よ也。孟子仁を敎とハ仁を敎
をつゞ仁を敎をそ天乃ふを敎をなり。乃ち此
のごとく豈戒ちつゝしまんや。且天ん地神乃んそ
を方ふ尊ふハ非ずや。をゝく人の左右ふ侍ふ
保くゝる者なり。是をれて頼子仁を叫へをゝ
孔子荅て曰。非禮勿視非禮勿聽非禮勿言非
禮勿動と。是仁ハ天地神乃んそ是ふ接

待をる八聖域のつゝしまる故顔子ふ荅へなふ
の仁をゝ此の如くつゝしまる者をり。中庸ふ戒慎其所
不視恐懼其所不聞とへるも。孟子ふ仁ハ天
の尊爵也人の安宅とへるも仁乃ふ
て聖学のまも順をべし。古の人の徳と積と
つくるハ皆此の仁をゝ求るをり孟子又曰君子
之於禽獣也見其生不忍見其死聞其聲不忍
食其肉是以君子遠庖厨也とり。此意をゝ汴
洋雞犬の類をゝ敎して禽獣とへなり。唐土ふ
ハ是をそこをゝ含ゝとをるをり。然る小者ふ
なる人をゝ此牛羊をと用のあをて殺て料理ハ

又云ふ。殺されて苦むこと甚し。寧ろ肉喰ふとも慈悲ありて苦むこと無きを善とす。君子たる人の庖厨に居るを云ふ。古へ四不食の戒ありて、禽獣と雖も殺すを見ること忍びずと云ふことを務めたるなり。今は殺を見ること忍びずと云ふことを務めたるなり。今は殺を見ること忍びずと云ふことを務めたるなり。今は殺を

周孔ハ佛ヲ非ル故ヲ戒ヲ儒者ノ戒ヲハ非ザル故ヲ云ク若人儒者ヲヤ悪ク衆生ノ業ヲ本トヨリ悪ニ非ズト雖ドモ仏人ニ貴賤ノ等制有テ殺生ヲ許ヨリ然ヲ惣テ殺シテモ苦ニハラヌ物ノヨシ古典ノ中ニ未見ヘラヌ。論孟礼記等ノ中ニ天子無故不殺牛諸候無故不殺羊太夫無故不殺犬豕トヲシ或ハ狗ヲハ捕ヲ綱ヲハ捕ベカラズト。或ハ渕川ノ魚ヲ捕ルカ檀ヲ設ケテ鳥ヲ射ル寝ヲ射ベカラズト。或ハ子ヲ妊メル時ヲハ捕ベカラズト。或ハ殺ヲ忌ル肉ヲハ殺ヲ忌若殺ヲヲ云ヘルヲヲヲ

此生仁獸も殺生せざるを仁鳥も殺生せぢるを
以えれバ仁人も亦殺生を好こゝろなきを理り
とおぼるゝより云く聖人実ゝ殺生を好
そゝのかざるハ仁のぞ一向ゝ戒めざるや答て曰く知
らざる仁物を殺ハ天人を殺ゝ天人を殺ゝ刹
我を殺也故ゝ聖道を修行ずる者ハをゝ思ひ
きるゝゆゑなれども天下のくゝゝ聖道を学ゝ
人ゝなくてゝ悪しゝ然る時ハとても制し遂られ如勢
ざる者ゝ止るゝをゝ以て法律を建立しゝ
者とるゝゝくなる者ゝゆゑ菩薩の霊王國を失つ
て中夭ゝ災ゝ来ゝ入ゝく程りて死を中夭亦霊王

ゝ大悪有る故ゝ己ゝ二人の女子を殺して霊王
の殃をきせて薨るゝの右傳ゝ出つ。是を以菩薩ハ不仁
のゝゆゑと云へ共ゝ又是を殺をるの後をつくる
ゆゑ。此等甚多の仁程を以くそゝの後をとりて
殺生の罪を奪なゆゑ。親の敵として人を殺をる。
孝をいく殺生の罪を奪べきゝや。先王の天地
宗廟をゝまつるゝ牛羊を用るも誠を盡て慈
中夭ゝ悪地を推て慈悲をゝべき者を。右のゝハ
或ハ賓客の膳ゝ或ハ羽毛皮角をゝて一切
の器械ゝ造るゝゆゑ。此等皆老人の機ゝへを
使役ゝるゝと同ゝ仁程ふして在上の人の天

下ゟ家を治るの法制迄ゟ周礼其ゟ考ユ記ゟ小雷ゟ。庶人の妄ゟ虚誕ととゝゟゟゟ八非もの奥ゟ鄭小出ゟの類を用ゟも勉強牛肉の丸薬振蔓(ぶどう)等(とう)の羹湯を用ゟと月一倒ゟて書生をれ衆ゟと奪篤も有るべきと云へもび加者八肉ゟ大ゟ在家の大ゟゟ老令ゟ短命ゟ帝中ゟ富人ゟ民ゟ八長命ゟもれどゝて知るべきゟゟ。史書ゟ悪ゟ之ゟ報ゟを行ハんとする者の物の令ゟを害ゟて若ゟや若ゟや云後ゟ八

べゟんや。若後生報應の説ゟ用ひざゟゟ用ひだて可之若今日ゟ有て物ゟ報ゟて来遠ゟ。幸報ゟて令ゟべきゟゟゟの者ゟと云ゟ物隠のんなゟ人ゟと云つべ悪ゟいゟか

改過 私曰上来い都ゟく事の説ゟ約ゟを立ゟ此ゟ篇ゟ人ゟ之ゟ者ゟ若ゟを改過ゟ者の乃ゟ歩ゟを進て仏祖の如ゟ旅て覚暁者也

せべ悪報有ゟと云ゟを知ゟべきゟゟ。春秋左傳并ゟ國語の中ゟ。人ゟ禍福ゟを云ひあてたゟゟ甚ゟ人ゟ吉凶ゟ先ゟん中ゟ前てぞれゟ面部ゟ是ゟ顕ゟ者ゟゟ。若ゟ人ゟ此ゟを知ゟざゟ故ゟ或ゟ

劒難小過或ハ故死ことそろまても何の辨もなく偶然として行そうのこと也。春秋の時ハ古代のこと多くて聖人の御在世ふとき時ふれハ賢明の人多くまそて人の言動をよて能知りたるなるへし。然るふくに若ハおく悪へき事ハ多し。実ゆて面部ハ是非のこと見ゆれども知こと能ハ是非のこと見ゆれども我心ふ是いわゆるたる不の過ちを改むへきそう。此まて分てこつの用ふのそう。

第一要發恥心とハ我身のわろきことを思ふく。ふく人賢人名ふとつふも。人そう。我ふ對ふ人そう。然ふ彼れハ。聖賢君子と呼まて。高代の師表とふ仰ぐれ。吾を人ふ見一身ふ恥ふ多ふ。実ふ卒生の不行不仁を考えをへ。一つとして人ふ對してそそくそうるまへ。空ゆて面部ふ見ふも顕れくるへし。左ゆくハ君神ハ云ふまへ。而ふ不備も知ふぬとくハ孔もそうふハさそく恥ふ。回恥之於人大矣以其得之則聖賢失之則禽獸耳此意ハ恥の一字ふ人の身の上ふ係ふくそうるゆへふ非ど。何ふ聖人ふもそうるれハ此恥と云者を係く知をへ。聖人ふも賢人ふもそうるそう。又恥

を知らざるべからず孟子の一語ハ過を改むる人の美和の捷径ならずや捷径といふの
のくろくのつなるくろうをそぐをへ分へ歩らはの如
めつう過を改んとをそる人ちぱ語を実和ふかちら
めて其ハ恥の一字ことを深く思惟をべきくるのうう。
第二要緊喪心とハ喪の字をそことくも和訓
うそへきことろくおそろーとそれどのうう。
用ん意途をと喪途とそて和民ぱ。ふら思べうう
トへ北うう。道よりよハ天うう。ふまた甚ふ方
ふ行住坐卧甘う。天神地祇をか罪と
てもふ居不方ふに非ざ。方ふ家舟と同居

ゆふ者うう。此説を疑ひて喪意考工うれた。
恥の一字を失ひてる恥の一字を失ひちべ吐う
うふ奴やうなる陰悪自然と止をきなうう又
今日利欲の為名聞の為ふ謀計を運一語を
かまへて人を欺んとをるりの或を陰悪なる
りの多くの人を知るまでとんぱ。我をよふ
うろと言隠ものうう。されば大学ふ如視其肺
肝と有く胸中を裁割くんらば如くんも者
うれで。うれど言くろめ言かぐうても不値一
文とうう。此意ハ鄙語ふ一文もなくぬと云と
同一辞うう。又論語ふ朝聞道夕死可矣と云

へう。此意ハ一生悪を造りし人の終臨て悔改て。一ぜんの相を矯直して死をる共可うそうといへう。志専一なれバ悪を改めて善とするハ譬ベ千年の闇室ふ一度火をとぼせバ忽千年の闇を滅るが如くなり。たとひ吾行の殺をうぐるも。老ての学問なうぐるてんの報うぬる者うそ。哀むべきこそ。一日そも改む過を改るとこそ云ハ先ハ悪ふ浪らざ。甚久く甚身も長くみをきハを稽をる孫ふ伝くる。又仏門の教ふうくとこそ倫理の教の趣うそ。又仏門の教よりて云へバ先ハ不定ふ悪ふ善永劫の獄苦ハ

ふ経うへ一生ハらもあらべきの事ふ候者うそ。第三要發勇心とくべきを起ぶとるを云也。人くの過を改むる事ハ。豈油断をへ行ふうんや。又怯弱神ふんを奪ハるが故うそ。若行の者の言中ふ衣を脱で海川ふ飛入ぢ如くふ毒蛇ふ指を噛なる者の甚指を切て捨らるが如くの念を起さへーー天台の釋る捨身決定也ハ云へう。従来悪ふ為せ一ぺ行の罪ハ不滅とこそ。過を改ふ当身も今日我身へ吹日死るが如く。過を改なる当身も今日生れしるが如しーと観念して。真實心ふ大勇

を仏とし此を以易の風雷益の教とう。右此三件の教を務め行ふ事なり。ゟ萬の過有〳〵又其の氷の日ゟ過ぐ如くさら〳〵にして又過を改むる事なく改むる事程を以改むる事なく改むる事なく改むる事なく

我ハ狂ふして彼ハ妄狂ふる故ふ記ろう。而ろふ妄狂ふる
狂をそんぐろ乃者ハ堯人ろうて有ろふ妄
たろぬ者ろれべ及つくハ思ふ不倹なろる故ふ思ふ忘れ也
たろ人ハ児童と角力をろうてふ玄ふ負ろう光
彼のそむぐろ如くろう。天下
無二自是之豪傑一亦無二尤人之學問一とてろるあう。
此玄ハ孔先人ハ仁世ろく偏屋ろろ者故。たとひ
吾ガ子等ハ非ろうとも改めく人ふ咎ろるハ
ろうぬ者ろう。況や是なろうと思ハ定ろるハ我ふ固
必ろる故改ろるなろうふして爭怒ろうぐろ万人
ふ猶ろて豪傑のくろ胸中寛大ふして大海の

如くなろ故ふ右ふ後ふ東西ふ水の至ルよ
随つく自由ふ在ふして帰ふ心ふもふき故
ふ。ろ年うのろ出まろうても怒ろ恚ろるハふき
ろいろう又者人ふ人をれふろ故
ふ而もちぐひれもつろ人ふ忤ふ怒者
ろう。学ぶ向ろろ人ろ揚ろうなどを射ろぐ如く
なろうぐふよ射まろく時ハ己ふぐろ系の悪き故と
くろうろく射ふらたろ人を恨怒ろるハふろ者
なろう学ぶ向ふ己ふをろ治めく徳ふと績者なれど
若不如意ろろうの者ろく我ぐ徳の薄き故なろう

怒らん云きく人をも学ひ向ふ人とも学ひ向ふ人とも学ひ向ふ人と

うつゝ安吟くに日天よ出ゆ時ゆ清乃亮冤
那神こゝぐく伏隠うゞ如くなう。曰く亮くい
發ともまゝよ。發とも。但一ふ若事
若るゆゝ志し。ゆ会相續して間斷ゆりをで那
会ゆ改ゝと待どし自然よ止むべきなう但一
是ゆ言ゝ根のくの形へかゝ示の真傳ゝ若一
ゆ真伝ふ壞ざゝくゝ事のよゝ統く改もべ一
ゝて若一ゆまゝ伝ふ修形のくゝ自力のゝゝそい
羅を滅一難一と知ゝてぞくく紙き昨よ改ひ
紙き交ふ交つゝ。遠くい仏天ゝ撃ゝ死を記一一心
丹精を猛勵して。至秩ふ急ゞ識悔ゆ老ゝそ

へ一或ゝて一七日二七日或ゝ一月二月ふるゝそれ
ハゐどゆ當身ふ於くく霊験ゝとゆるゝまゐ。甚霊
験の一二をゝく。或ゝ
の滞る事なくぴろくくゝなうゝ又世間ふ貪求ゝ
不存ゝゝれば。ゐ中ふゝも動執をゝるゆゝき
なう。或ゝ智恵ゆふ冥くゝて若ゝゝ世間の道
理ぞゝゐ如く。若ゝ書物乃義理なゞ。従
前當家ふ居ゝる者の忽四方のゝ補ゝと冥き
ゝる如く。ゆゝゝれゝゝ處冗沓而觸
念皆通ゝゝたゝゝべゝ世事繁多の場系ふ有て思
業ふりゝらどゝして刺彭をゝるふ悉甚ゝふ会ゝゝ之

あらいそ 濁窕讐而 眄 頂作喜とも我ふえられ
怕 嘗て 倣 そる者 嘗 ふ ぷ ぷ ぷ

のこれ非をそゝる悪ふ
口ゝも言てうらくとお暮をハ歳もまもられる
べしされバ大の如く吾の
方ゝも效なるゝなるう。甚有增るといへ人の過悪
深重ゝる者ハ或ハ心神昏塞轉頭即忘くへそん
次第ふ老耄もてくる中ゝ
夕べふ亡ん。右ふせんとおもひしゝるもゝもてくく
中ゝれなる者ゝゝ。或ゝ無事而常煩悩くへ
るゝもゝをきは但むゝくくと
悲こゝ或ハ恚げゝれるゝをゝ
を強て乳ひおめ。或ハ及ぬゝ
ゝて心神を惱乱をゝくなゝう。或ゝ見君子而報
然消阻とへ道の正しれ人ふ出會てハ自無こそら
そゞうくゝ平生の務めぬもて早くゝゝとなゝん
ゝを欲をゝとなゝう。或ゝ聞正論而不樂とへ
屑大和乃者をゝくゝ心しく物語うゝとするを
算くへ算ゝれさゝるゝのこゝれべ佛見をゝて
苦しむとなゝう。或ゝ施恵人而反怨こへなまく
人ふ慈恵のゝなど施せべゝて恩を忘みゝく
報ぜゝる中ゝれせゝるゝくとなゝう。或ハ夜夢顛倒甚
妄言失志とへゝゝなどこゝるゝの有ゝふも吉ゝる
ゝを爰ゝくゝ及て凶ゝるゝとなゝう。或ハ吉くの霊爰

そこそこくも我が身傷よの方み見ひそうへ人ホ
も妄うに語う耳せ志もその狂しくなること也
是皆積悪の験なる者なろへくく左ゆうのつ
んよ見へ知うなくくんこへむど憤發して過ちを
改むべし。猶豫もそるの事ふ非ど。それ先生一家村書
記云ひ第三條ら根の人の倫そる系みて
幸傍家ふ於く別ふ懺悔乃俊法有う。在家下根
のへ人の修行しいるるの事ふ非ど。それ先生一家村書
そ蓄して天下の人ふ名を働んとそるに上中
下三根の人を俱もべきふ非ど。要き懺法へ別
添ふ也づて大概を知ふ志もるなるべし和んみ人

は一條の及び雖きそとうえく全篇の主旨意と称う
るそ生。且今又是ことを加へて初心の人の為此
一条ふ准んじて一つの易行をえべだの如く
挙くれ悪念を起るはぞしーも強く制止てど真念
乃當下をうくあえて彼のよふ出を秘文をと
唱ふべし是玄上のふ
ふ要べきふのしよ
さそえは改過の篇の初やふへの威儀言動を
えて古聖を知うるの左傳國語をえ見とうう。
左傳國語をえそそうへ人も自會得をべきる勿
論也来ざんばうへ人も甚んあれなくべし。今

二書の内そのく累ーてらくゝ糸ゝび○減孫達
諫桓公周の内史冩て。減孫達が魯国ふ在て子
孫長久なくゝべきさるをかゝくゝ知るゝ○楚屈
瑕擊レ足高固伯比見て屈瑕ず放軍ーて絶
ゝそくゝ孔せーるゝをとるゝくゝ知るゝ○宋乃公
子御說と云人魯国ふ使ふ對ゝるの辭を減
孫達冩て。御說が宋の君とるゝべきこゝを
かゝて知るゝ○周の王子頽宴樂失時鄭伯
冩て王子頽ふ佐そゝをゝ糸くゝ知
るゝ○鄭厲公六代の樂を備原伯冩て其年の
六月厲公卒さるゝをとる糸て知るゝ○郭子

と魯公と執玉高下めるゝ子貢見て二君共ふ死ー久
ーかゝゝざるーるゝをとるゝ糸くゝ知るゝ○楚の子越椒
執斃傲叔仲惠伯見えくゝ宣ゝ四年越椒ゝ一族盡く滅
されーるゝをとるゝくゝ知るゝ○宋公ー叔孫ーく宴ー
て相哭を樂祁ゝくゝぴ年の冬二人共ふ死せーるゝを
るゝて知るゝ○鄭伯捔王過両捔同士負伯ゝくゝ。
鄭伯のゝくーかゝゝべーて死せーるゝをとるゝくゝ知るゝ
○成肅公受服不敢なゝ。劉子ゝて成肅公ゝ瑕と
云ゝくゝて死せんるゝを糸くゝ知るゝ○周の景王
無射を鑄ゝ冷州鳩景王のゝ疾をゝ崩ぜんるゝ
をとるゝ糸くゝ知るゝ○齊の高厚太子光をゝ相ゝくゝ諸

候ふ會と不敬なり○士莊子と云ふ人と二人と殺されしものと知る○魯の叔輒日食ふ哭を聞て知る○鄭屢宋を侵して競孟獻子再び攻の三ヶ夫盜ふ殺されしものと知る○衛の石共子死と其子悼子哀まざ孔成子再び悼子が出奔せしものと知る○齊侯と衛侯と會を二候俱ふ不敬のもの叔向見て齊侯へ讓ぐ共ふ年衛侯そ共二年同く弑せらるゝものをと知る○晉の程鄭公孫揮ふ會して降階を問ふ明再て翌年程鄭ぐ乱せしものと知る

る○晉の轅宣子聘周辭を失ぜざ夫子再て宣子ぐ子孫の栄へんものと知りなり○鄭乃子展伯有ぐ子西子産ぐ子大叔印段公孫段以上七人詩経の中の詩をもひくふ其人くの体裁を知る。論定せり。已上二十條

決科要語

楊貞復先主撰

体寧と云ふ処ふ洪甲先生と云人ぬるぷ其の門人ふ程學庫と云人ぬるぷ聰明ふ操正直ふして身ふ人間ふ有るぷ神を冥中ふ往来せしめたるぷ遂ふ冥中ふ雷

部朋友とて雷方の役人となれるもの多く
る故ふ人の吉凶生死を云ふ微塵もなが
友のに雷雨のつゆ恐るべきを知らず
ふ師匠浩甲先生へ告げ知らせもなくぱ始
へ雷て知る者なり。但洪甲のみ知るや或は洪甲我
身の一生涯のつゆと同ひそれを学ま同く先生今世
へ縁行義ー但ー真中に於て甚しき先生を重ん
ぞる也因く先生を訪ふ隣君の師と也んるものと称へう
と云へう。洪甲聞て一笑して曰くとても今世の界ふ
ハ夢幻なり。今るも冥中に徃く隣君の師となる
ハ本快活のつゆに非ずやとそへう。然る処其日の暮

方ふ及んで洪甲俄ふ打倒きて正気を失へうそのま
るふ家門の人庭よりをくありしに友人のもの
者ふ六人ともをたくて居々るぞ暫くありてふ返た
ちまち洪甲も往なく癒まう其翌朝早くふ
学堂来るく洪甲に云やうへ先生昨晩ハ行るもせ
りしや唫吟ろひなひしるや宵ん晩先生の隣君
の師とるるハ快活のつゆなりとの言ハ冥中に冥へ
なる故ふ外使者を下して先生を迎へなう然れ
共拒ん先生の懇ふいひあひしるものを知る甚ふ余
訪ふをきことやのべくお止めふ及ずなりとそ
ふ冷笑して止そうきと。

さて冥中のる學をなす。洪甲に告げ知らしめる。多くれども。洪甲うつてくふ沸さず。但播雪松と祝石林と二人今ハ許して語るのみ。然こて此二人洪甲と交る人のみなで學ぶ同徳行共ふ勝をたる人ふれ九何ぞもこ及筭のこと非ず。

此をふ伝ふく洪甲學ぶ聖同くし一事ハ我まづ識分ふるを官ひくしべ學ぶ聖ふ雪松と石林とふ出ざれハ知るをも但し求考るのも雑きるのふハ非ざることひきざ。二日過ぐ来て洪甲に告て曰く。雪松ハ萬曆十一年癸未の年の榜ふ姓名ふへたる石林ふ榜ふ及筭せり。洪甲又石林ふ及筭の時弟を教んるのを獨學ふ聖同くなるをと承知仕ふ。其の榜ハお年の十月ふ定るふ。秋の榜も甚年の正月ふ定るなり。旦榜の定るをと知らず甚弟なるでもとくふ洪甲年てん中に當ふ甚年より三年過て万曆十三年乙酉十月ふて又學ぶ聖ふ同學聖對て曰く須二の天榜うれるふ。ふへるハ萬曆十四丙戌の榜なるふ。下なるハ同十七年己丑の榜なるふ。已丑の榜ふ石林公の姓名あるふ然るたふ下の二榜の姓名其外ふふるふれバ或ふ上ふ下となるふ。下となる。

又姓名の数多くなりて決定せざる
るのみならず洪甲其数を数ふるを要とせず聖同く冥
中のもの陰あるに従ひ報応もなければ
て冥中に於て人間の罪福を處分することを。
玄微細なるもの許鄙なるもの月旦評のごときもの
非ざること。孝生吾事を為人すとても。不圖一会悪ん
生ぜられて神乃其機を
為人すとても。痛悔改むるに及ばず神又其罄香
を歓喜と形と響との如くなる者
ならず。て亦先生も仰ぐ
どる星子文昌星と云ふ及第の一事を專此

の文昌星の府小属をるなり敢小文人立身の
るの八皆此府の性而小載なるべきにあらず
小なく人間文人の罪福を微悪と處置する格式を見
る小其幸人のみの微善微悪ハ及ばず。高祖父曽祖父祖父父微善微
悪までも其幸人出世の時小計校ふるの有るの
なら此小依て祖先の積徳の積まるべき人不
幸なれば出世をるの有るべき祖先不徳なれで
幸人なれば落第をるの有るべき其人身持を換
て東北の人中に於て固く正直をもち悪毒の
意るなりのをるべき挙らるべき其人身持

を怪むやうなれども。ふと中ふ諺うやうなくて葉ら
ろくなるつゞく己ふ天榜ふ名を載らるゝ人の名を削らるゝ中ふ
ぐ故るつゞく甚く人幸名の載まつれ不若人うてる。
忽戴らるゝハん中若会ふ改むるぐ故るつ寛中の
成敗ハ甚くの身おんりちふ因て忽若となるつ忽
心と成うて平生暫ぬ葉亜るつハなゝ。今天
榜二処ふかくうて二榜の姓名よ下榜減不定也。
此ふ因るく石林ろの榜ハ已丑の年なれ共及第立
身のるつハ甚ぬふるゝぢ今るつ升官ぐ
くなるとろつ然るふ石林幸不若人ふ非ざるよ

ふ氏るつを写てつるく怪めるる故ゝや。果して己丑乃
年及第せる而も此年の判者ハ楊貞復先生のるつ
なるつ。雪松るつ子と同ぬふ生せるつゝなるつ。○私ふ曰判者ふ
馮用之して有るゝなるつ。○私ふ曰判者ふ始の
元例の処ふつるる如く。謝諧の点者の如くうるつの
るつ。前着の表ろ吏部郎と云なるつ。さて予十日
石林の方へ訪いなるふ石林の物語ハ備ふ石林ようう
承つるなるつ。予ぬ曰ぬ語ると写て大いふ感歎しつゝ
思ひ合とるつ有るつ予幼かの時ようる父ふ従ろ及第
の学問せるつ。るふ倣釈のお表ハ夜徹ふ下足を
て若文字章句のるふ於るく各ぶ發吟のこと

なでの給ひバ甚かなびごとふ父ふ望くして喜バ
めまれり然まだ但臧る不そ予ら母人甚多の病
ふ苦しくろ此ふ因て毎夜人の寐ることを得
て大路へ出て不通ふ向く行攀てをうけたく甚を
ろ我をふるにとぞ早く及第之身しぬ父母ともに
息災延命ふして長く家門の繁昌をうんせしめた
まへとにまる唱へんまるをもて行残せうぜ時言ふ
ハ至夜但父母のるものこそ
在郷学まして八二十一歳のけ己ふ撰人の数ふまう。
其後都の試場へて八度くし出しれ甚度ごと
ふ落第して空しくてのこ家ふ還まうまふ還

るおとふ父母のん中をふ祭やう骨をひしぐ往
ふ悲しかろ己里ふ於くく又大雪猛のんを記し
仏をふ向く朝夕黙禱して日く某一罪業深重
うて不孝と過る事能ハど。今ようまてと
ひ大友大採をいる甚志を道徳ふ潜毛頭も富
貴ふ泥べらべ官政ふ在くハ民を安ごることを
専としてかうそめふも某ら身ふの私をなそ
をうらべさく。總じてハ人ハ我う君ふ忠をを尽し。
下ハ我が父母ふ孝んをと我ごべし。ばん若敢るのあ
らべ神明忽ち罰し冥ばつを蒙りばつを立
てく三年過く及第して吏部の官ふまて升

まるなり学は幸の冥中のるを勉強せざるべからず
をもつて楽むべきふん中の若亜ふ困くよ天の冥衛
冥罰有るのハ予が往来の仕業ふ思ひくぶれを
後ふ於てべきこのと大抵今の世ふ在くも。及第立身
もつて名誉を天下に伝ふるの人もまぐまゝあり乃
仕合と思ふべくんば皆幼のはようん中に大恥を
立るなり。然も天授を漏さるを忘む故ふ妄
つふんこハ後らざるべし。予が今の身ふ及ひしも。右
の如く私んを立てくんん身の行ひを勉たる故ふ
らんと思ふばかりなり。此くやも天授を漏とる
も先。後ふ一つの止むるのをはぢるの志有りそれ

乎ハ五穀の干場ふ穀粒あるをハ。其友こと呼ひ集め
ち原野のまふ其類ちを集。ち類畜類行余なく。
今夫天下の士人ら皆我が同類ふ侍くばるのを
を冥ていうでう我が同類ふ侍くばるのを
ん学聖君のお徐の教きこ。先ふ予が立身せ始末を
のべて及第立身ふ徳行を先とべきるを諭
おく年子ふ告知くしむる者さくし。
私ふ曰此決科要諾の仮者楊貞復先生ち此
緑未の年号。先ふ潘雪松ち馮開之が時ふ立
身せ一教きて考ち見べ。仮先生とハ因時
代の人さり。因くて考ち見べ。仮先生の此緑の歩る

を幸として此書の
此奇事を写及びて子元先生の方へ話う
けて加くらをたるもや知らぐぐ。

東武北泉戴岳画
陰陽文繪鈔
全部二冊

このに行人のそひのくるや亜信の自知
孫をうち基めうかくをものまりめて
此ことめをもそそぐべし
和字功過自知錄と乙全部一冊也

嘉永庚申 藏書

文政元年寅十一月再板

京都	堀川通高辻上ル	植村藤右衛門
	日本橋通南壹丁目	須原茂兵衛
江戸	両國通吉川町	山田佐助
	高麗橋壹丁目	赤松九兵衛
	順慶町御堂筋	中邨源兵衛
浪華	心齋橋安堂寺町	田中太右衛門

亀山藏書